最新國文讀本

巻四

4a
810
昭8

41686
教科書文庫
4
810
41-1934
20000
67423

資料室

4a
810
S8

文部省檢定濟

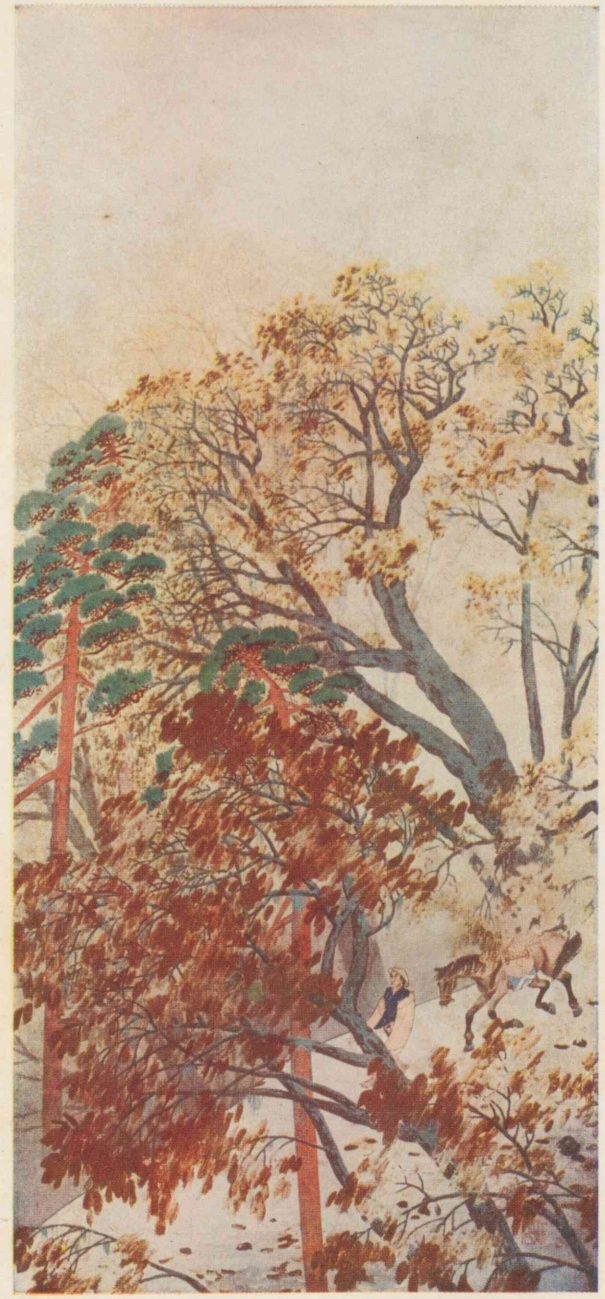
昭和八年十二月二十七日・中學校國語漢文科用
昭和九年一月二十九日・實業學校國語科用

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

最新國文讀本

湯川弘文社

廣島大學
教
67423
圖書



山路

横山大觀筆

最新國文讀本　卷四

目次

一　神域　溝口白羊　一
二　乃木將軍　櫻井忠溫　一六
三　文章道　島崎藤村　二八
四　松坂の一夜　〔雲萍雜志〕　三五
五　隨感二題　四三
一　朝顏　四三

全二 立志

六 晩秋 〔大和俗訓〕 齋藤茂吉 四五

七 田園雜興 大町桂月 五一

全八 絲瓜の棚 六〇

九 名器を毀つ 薄田泣菫 六二

一〇 畫行燈 福本日南 六八

全一一 膽力の錬磨 嘉納治五郎 七四

一二 輿上の勇士 〔常山紀談〕 八一

一三 朝の海 吉田絃二郎 八五

一四 七株松 落合直文 九三

一五 林の道 幸田露伴 一〇一

一六 雪前雪後 高山樗牛 一〇七

一七 日蓮上人の人格 姉崎正治 一一二

一八 別離 和辻哲郎 一一七

一九 根の營 丘淺次郎 一二七

二〇 簡單より複雜へ 新村出 一三五

二一 はやり詞 田中寛一 一四五

二二 我が文化の將來 徳富猪一郎 一五二

二三 昭和日本 九九

〔自修文〕
一　蜜蜂　土岐善麿　一六一
二　亡兆　菊池寛　一六七
三　眞男子　笹川臨風　一八二
附錄
常用漢字表
正俗字表

最新國文讀本　卷四

一　神域

代々木の森　東京市澁谷區代代幡町に在り。

快美な色彩の反射と和かい感觸とをもつた秋の陽光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにほつて來る新しい檜の香をかぎながら、幾度其處を通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

衝動
ショウドウ。

或時は、無數の蟻の集團が大きな餌を引くやうに、六七丈程もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら曳々聲して森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだと、さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感ずると同時に、生みの親の墓に對する樣な強い懷かしさが充溢した。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整つて行くのが、たまらない程嬉しく思はれた。

其の明治神宮がたうとう竣工を告げた。

幽邃
イウスヰ。

流造
「ながれはふづくり」ともいふ。側面は破風造で棟から前の軒先までを、棟から後の軒先までより長くして、そりをもたせたる造りかた。

素木
シラキ。

かつて赤土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つも竝んで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今淸々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常綠の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間にやら、すつかり見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隱れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域。眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と優雅との領土。私ははじめて完成した明治神宮の神苑に立つ

延人員　工事に使用せし總人員を一日一人の割合に計算すること。

尺〆　切口一尺四方、長さ二間の材木を尺〆一本といふ。

千載不動

二柱

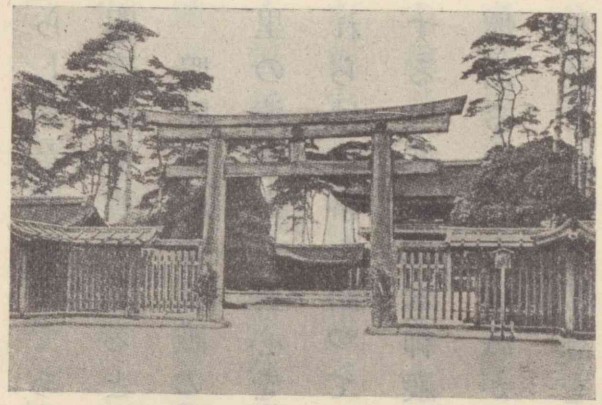
た時、其の改つた光景を見て、今更のやうに強烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記錄の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺〆一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して隱れた部面に働いた強い力こそ、實に此の明治神宮の基礎を千載不動の固さに築きあげたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖德と、海よりも深い昭憲皇太后の御仁慈と、此の二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の至純なる感謝の心情と、此の三つのものが、陰に陽に工程の進

國民崇敬の標的

捗を刺戟して、遂に此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力であることは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實であるといはねばならぬ。

嗚呼、純粹な至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、數百里の遠方から眞心をこめて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つてゐるか。實に此の神宮の御苑を形成する一株の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇・昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

今までの神社に曾て見たことの無い明治神宮の特色は、實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那、第一に此の事を直感した。そして一歩一歩、美しい小砂利の上を、神殿に近く蹈入るに隨つて、愈〻肅然たる心持になつて、深く襟を搔合はせた。



第三鳥居

參道の兩側には、盡きることを知らない密林が何處までも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。

刹那

肅然（シユクゼン。）

鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山市萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸した風致の好い小流で、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が錦繡の影を水面に落して、美しい秋の景色を添へてゐる。此處は神苑の中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總てが纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に、千七百四十年の樹齢を重ねたとい

清冽（セイレツ。）

萬成（花崗石の名産地。）

勾欄（コウラン。）

明神鳥居　柱は圓く笠木・島木はそりを持ち、額束・くさびあり。
幅員　フクヰン。
亭々　高く直くのびたちたるさま。
土佐繪　平安朝時代に起りし畫風。

はれる直立六丈餘の臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとの事だ。

此の鳥居の在る處は、南方原宿方面からする幅員八間の南參道と、北方千駄が谷から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ぱつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出來る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて、其の總坪

樓門　ロウモン。二階作りの門。
木曾　長野縣西筑摩郡木曾川の上流。
衆庶

數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてある。近く拜殿にのぼつて拜すると芳ばしい檜の香氣が強く鼻をうつて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して、奥は卽ち神靈のおはしますところ内々院で、衆庶の漫りに窺ふことを許されない神聖の場所である。

私は默禱を終へて、始めて向うを見上げた。

まあ、何といふ明るい快い感じを持つた社殿であらう。今まで見た大抵の社殿が皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な併し陰欝な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは、隱す所の無い心持で、十分な光線に總てを解放し、

總てを露出して見せてゐる。而も、それでゐて決して淺薄な心持はせずに、却つて一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうのない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭のさがるやうな強い威力が迫り來るのを覺える。

いかにも明治天皇の神靈を奉祀するにふさはしい神宮である。

久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く觸接し、國民と親しく協力して、新文明を吸收しようと御勉め遊ばされた明治天皇の活動的・進取的の闊達な御氣象に對して、如何にもその明るいお宮の感じが、ぴつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれる。

闊達　クワツタツ。心ひろくしてこせつかぬこと。

均齊を保つ

視野　目に見ゆる範圍。

拜殿を中心にして左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして其の奥に續いて便殿の遠く望まれる心持、それらの總てが、又たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

南神門

拜殿を下りて、西神門から出ると、約一町に亙る森林帶があつて、その向う、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が一面に綠の色を展べてゐる。

嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が、其處に見られる。

こゝらへ來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶びて來て、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目につく。寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間、さうした色彩が續いてゐる。寶物殿は、形式を中古時代に取つて、其の材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、これに使用した八幡製鐵所製の鐵材は約十二萬貫に及んだといはれてゐる。

後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を廻つてわかくしい楓の樹が美しく植ゑつらねてある。

八幡製鐵所　福岡縣八幡市にある國立の製鐵所。

池塘　チタウ。いけのつゝみ。

私は此の寶物殿まで來ると、再びもと來た道を、表參道の桝形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり左右兩側にある古雅な木柵を廻らした一構は、卽ち明治天皇・昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑內の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、何れも極めて御質素のものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのまゝのもので、殊

寶物殿

舊御茶屋　隔雲亭といふ。

更技巧を弄しない處に何ともいへぬ優雅な趣を帶びてゐる。此の御苑は、祭神二柱の御在世中殊に御愛賞遊ばされた處で、大空高く聳えてゐる松を背景にした芝生のあちこちに、美しく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生茂つた小丘の上に連なり續いてゐる櫟や楢の雜木林にも、東京近郊では到底見る事の出來ない野趣がある。

私はこれらを一わたり拜見して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。

振返つて見ると、神殿のあたりはすつかりまう深い靄に包まれて、晝でも暗いほど黑々と生茂つてゐる樹林の中をかつきりと切開いたやうに、路線の白い色の暮殘つて續いて見えるのが、何となく嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、其の神祕な境の中に、ほんのりと浮んで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも長く鑄附けられたやうに殘つてゐた。

一草一木の末にも祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な、幽邃な、優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果して此の深い印象を忘れる日があるであらうか。

（溝口白羊―明治神宮紀）

溝口白羊　名は駒造。文學者。大阪府の人。明治十四年生。

明治天皇御製

いにしへの姿のまゝにあらためぬ神のやしろぞたふとかりける

十一月　明治三十七年。

ベル　Bell　電鈴。

白井中佐　名は二郎。第三軍參謀。

齋藤中佐　名は季次郎。第三軍參謀。

乃木少尉　名は保典。乃木希典の第二子。

二　乃木將軍

十一月二十八日の夜であつた。

第三軍參謀部の電話のベルがけたゝましく鳴つた。

「何か？」

と、受話器を耳にあてながら言つたのが白井中佐。

「俺は白井ぢや。君は齋藤か。」

「ふむ、また失敗か。何！乃木少尉が戰死した！戰死したか？どうして――傳令中に？さあ、それを將軍に言はんといふわけには行くまいが、よし〳〵何とかするよ。うむうむ、まう一度夜襲するて。よし、弔ひ合戰をやつてくれ。さ

よなら。」

かういつて電話は切れた。

乃木大將

白井中佐は、受話器を手から離しもしないで、呆然としてゐた。眞黑なものが目の前に突つ立つたやうになつた。窓の外にはひゅう〳〵と寒い風が闇の中を吹いてゐた。時計を見るとまう九時に近かつた。中佐はどうしようかと考へた。し

かし、第一、戰況を報告しなければならないので、思ひ切つて乃木大將の部屋へはひつて行つた。

部屋の中は眞暗であつた。大將はまう休まれたのかと思つて一寸躊躇した。しかし大將が火もつけないで部屋に居られることは、いつもの事なので、別にそれを怪しみもしなかつた。休んででも居られるのかなと思つた。すると暗い中から「誰かい。」といふ聲がした。

「はい、白井であります。」

「さうか。何か用か。」

「戰況を申し上げに……。」

かういふと、ぱつと燐寸が光つた。大將の顔が蒼白く光

躊躇（チウチヨ）。

つた。大將は蠟燭に火をうつした。蠟燭のしんがじいじいと音を立てた。

「戰況といふと？」

「二百三高地でございます。」

「うむ、どうだつたな。」

「遺憾ながら、又失敗に終つたといつて來ました。」

「さうか。――死傷はどのくらゐあつたな。」

「は、まだはつきりわからぬと思ひますが、すぐしらべまして。」

蠟燭の灯に照らされた大將の蒼い顏を見ると、それ以上のことは中佐の口からは漏らしかねた。大將はぢつと灯

二百三高地　旅順要塞背面の重要地點たる小丘。海拔二〇三米。

を見つめたまゝ、何ともいはないでゐた。中佐は大將の顏を打まもつてゐると、涙がこみ上げて來た。そして手足がぶる〳〵と震へた。

「死傷者をよく調べて下さい。」

大將が思ひ出したやうに、かういつた。

「はい。」

「まうそれだけかい。」

「それに、閣下、御令息が戰死されました。」

中佐の口から我ともなしに吐出された言葉であつた。

何だか大將から引出されたやうに。

「何！保典が？さうか。」

アンペラ　敷物などに用ふる下等なるむしろ。

友安旅團長　名は治延。後中將に進む。大正二年歿。

かういふと、大將はふいと蠟燭の火を消してしまつた。そして體がアンペラの上に倒れたやうな音がした。

中佐はぢつとそこを見つめた。しかしまう何の音もしなかつた。中佐は足を忍ばして外へ出た。

ごう〳〵といふ風の音が、窓の外を通り過ぎた。

保典少尉は、友安旅團長の副官であつた。三十日の午後八時頃、旅團長が殘れる二中隊を提げて突擊するに決し、その命令を乃木副官に傳達させた。乃木副官は承つて塹壕內を前進中、額に銃彈を受けて卽死したのである。

この報を電話で話したのが、軍の參謀——第一線の狀況視察のため二百三高地に出てゐた齋藤中佐であり、これを

聞いたのが白井參謀であつた。

軍の高級副官吉岡中佐が、乃木少尉戰死の報を聞いたのは、白井中佐より少し後れてであつた。

吉岡中佐は津野田參謀にどうしたらいゝだらう、將軍に話したものだらうかといつて、當惑してゐたが、結局津野田參謀が話すことになり、乃木將軍の部屋に入ると、將軍はまた蠟燭に火をつけた。

津野田參謀が恐る〳〵乃木少尉戰死のことを報告すると、この時は、

「そのことなら知つてをる。好く戰死してくれました。これで世間へ申譯が立つ。」といつた。そして又火を消して、

吉岡中佐　名は友愛。後歩兵大佐に進み、聯隊長として出征、明治三十八年奉天に戰死す。

津野田參謀　名は是重。後陸軍少將に進む。昭和五年歿。

ころりと横に寢轉んでしまつた。

津野田參謀は手持無沙汰に部屋を出て、吉岡中佐と二人して聲をあげて泣いた。

保典少尉は、師團の傳令將校として比較的安全の職に置かうといふことになつてゐた。師團でも勝典中尉戰死のこともあり、いくらか保典少尉に目をかけてゐたのであつたらう。

こんな話を少尉が耳にしたので、早速少尉は父大將へ手

乃木保典少尉（右）勝典中尉（左）

マント
Manteau 外套。

紙を書いた。

一、先日私自分にて荷分け致せし外、母上様より御送附相成候マント、此の者に御渡し有之度願上げ候。

二、又自動拳銃を第一聯隊の故兄上様中隊へ送附の儀に付きて、私自身にて參り兼ね候に付き、何卒父上様の御添書を頂戴仕り度く願上げ候。

三、先日御話有之候私師團司令部へ參るとの話、歸營致し、考へ候所、現今名譽多き野戰隊小隊長より、殆ど非戰鬪員に等しき職に轉ずる事に候間、直接敵に接して兄上様の仇を報いん事も爲し得ず、且は何の特別の技能をも有せざる私が、選拔を受くるの理由なきに、比較的安樂なる位

置に赴くは、他同期生に對し心苦しく、他にその適任者、例へば外國語をよくする者多きに對し、甚だ面白からず考へられ候故、或は此の御話の儀、御變更相成らざるや一寸御伺ひ申上げ候。尤も御命令なれば致方も無之候へ共、せめて旅順陷落まで如何にか相成らざるものにや、御伺ひ申上げ候。先は要事迄。

二十二日　　早々可祝

父上　座下　　保典

保典少尉が兄の仇を打ちたいといふ念願、それを讀んで大將は非常に喜んだ。そして師團司令部へは取らぬやうにしてくれと師團長へいつてやつた。それで友安少將の

情實

副官になつたのであつたが、二百三高地で最期を遂ぐるに到つた。

兄の仇を取りたいから第一線へ出して貰ひたい、特別の技能のない者を師團へ取るといふのは、友人に對しても情實があるやうで心苦しいといふ保典少尉の態度は、實に立派である。ことに父將軍に對する親みの情が紙外に溢れてゐるのを見て、そゞろに涙を催さしめる。

乃木大將が兩兒を失つての後の心の淋しさはどんなであつたらう。この手紙を見ても父子の睦まじさがよくわかる。勝典が死んでも、保典が死んでも、たゞさうかと多くをいはれなかつたが、心臓は張裂けるやうな思であつたらう。

この父にしてこの子ありといふことは、實に乃木大將父子の如きをいふのであらう。

（櫻井忠溫―將軍乃木）

櫻井忠溫　陸軍少將。愛媛縣の人。明治十二年生。

凱旋

王師百萬騎虜征。
野戰攻城屍作山。
愧我何顏看父老。
凱歌今日幾人還。

（乃木將軍）

三　文章道

十七八歳の頃、私はよく隅田川で泳いだことがある。全く水には經驗の無かつた私も、漸く岸を離れることが出來るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通つてゐるうちに、對岸まで泳ぎ著くことが出來た。更に又一夏泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃によくも分らなかつた、水瀨の速い遲いも分つて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと溫かいとも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることも出來た。板子

隅田川　東京市中を貫流する河にして荒川の下流。普通千住大橋より下をいふ。

無しには溺れる外は無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普通の泳ぎ手が行ける處までは、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことは、なか〳〵容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、拔手の上手な人を見たりした時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違無い。そして根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難く無いに相違無い。

信州の小諸に居た頃、私は弓を稽古したことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心

浮身

小諸　コモロ。長野縣北佐久郡淺間山の西南にある町。

掛ける。唯當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に賴むところも無く、矢の曲直を辨別する力も無く、さうして幸に當つた矢は、高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得の有る老人が、私達の矢場へ來た。その老人が、先づ姿勢を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、假令的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所に行くやうになつた。これは文章の道にも當篏めて見ることが出來る。唯好い文章を作らうと思つて焦心することは、決して目的を達す

一手　ヒトテ。矢二本。

る道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ自己から正してかゝらなければならない。

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鍬を擔いで行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、サクをかけに行つた。馬鈴薯の花の白くさかりな頃に行つて、試みに土の中を探つて見ると、はや圓いのが幾つも

サク　土をあげて根にかくること。

嚴肅

幾つも根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。畠の中には、嫩く育つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でも能く思ひ出すことが出來る。我々が文章の手本とすべきものは、何程我々の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。試みるといふことは、悟るといふことの初めである。

新片町　東京市淺草區。
淺草橋　神田川に架す。
兩國橋　隅田川に架す。
櫓　ロ。
傳馬　テンマ。傳馬船のこと。

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界隈を漕廻つたことがある。最初のうちは、無暗に手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力で、ゆつくりと櫓を押すことが出來るやうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突しないやうにと、さう思つて漕いで行く樂みなども、それから起つて來た。その後、船頭のするところを見

ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある。簡素の美がある。文章の道にも無暗に筆を弄することが、決して自己の眞の表白とは成らない。

眞に好い文章には、眞に好い結晶の力がある。

（島崎藤村―飯倉だより）

況は「いはむやは、いふにも及ばず」といふ意の言なり。平康賴入道が寶物集に、「申さむや十六丈をや、いはむや金銅をや。」と大佛のすぐれたるよしをいへり。この申さむやともいへるにて心得べし。

侍るといふ詞、伊勢物語にはたゞ二つならではなし。その二つは、せうそこ文の中にあるなり。

（本居宣長―玉かつま）

伊勢松坂　三重縣松阪市。

老舗　シニセ。數代繼續してきたる商店。

得意

岡部先生　賀茂眞淵。

四　松坂の一夜

時は夏の半ば、「いやとこせ」と長閑やかに唄ひ連れゆくお伊勢參りの群も、春先ほどには騷がしからぬ伊勢松坂なる日野町の西側、古本を商ふ老舗文海堂柏屋兵助の店先に、「御免。」といつて腰をかけたのは、魚町の小兒科醫で年の若い本居舜庵であつた。醫師を業とはしてゐるものゝ、名を宣長といつて、皇國學の書やら、漢籍やらを常に買ふ、この店の得意であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手を拍つて、

「あゝ殘念なことをしなされた。あなたがよく名前を云つておいでになつた江戸の岡部先生が、今の先、若いお弟子

と供を連れてお立寄りになつたに。」

といふ。舜庵は、いつものゆつくりした調子とは違つて、

「先生がどうして此處へ。」

と、あわたゞしく問ふ。

主人は、

「何でも、田安様の御用で、山城から大和へお廻りになつて歸途に參宮をなさらうといふので、一昨日新上屋へお著きになつた所、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留。今朝はまうお宜しいとの事で、御出立の途中、何か古い本は無いかと、暫くお

書肆文海堂の額

田安様　田安宗武。徳川吉宗の第二子。眞淵に從ひ學ぶ。明和八年歿。年五十七。（一三七五―一四三一）

浮腫　ムクミ。

休みになつて、參宮にお出かけになりました。」

舜庵「それは殘念なことである。どうかしてお目に懸りたいが。」

「迹を追うてお出でなさいませ。追附けませう。」

と主人がいふので、舜庵は一行の様子を大急ぎで聽取つて迹を追うた。

迹を追うて松坂の市街を離れ、次の宿なる垣鼻村の先まで行つたが、どうもそれらしい人に追附き得なかつたので、すご〳〵とわが家に歸つて來た。

數日の後、岡部衞士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松坂なる新上屋に宿

垣鼻村　三重縣飯南郡飯南村の大字。松坂の南に接す。

二見が浦　三重縣度會郡二見村の海岸。

鳥羽　三重縣志摩郡に在る町。日和見山は町の西北にある小丘。今は日和山といふ。

村田春郷　眞淵の門人。歌人。江戸の人。明和五年歿。年三十。（一三九九―二四二八）

村田春海　春郷の弟。眞淵の門人。國學者。文化八年歿。年六十六。（一四〇六―一四七一）

冠辭考　十卷。冠辭を集めて、五十音順に配列註釋せしもの。

萬葉考　六卷。萬葉集の註釋書。

有德公　德川吉宗。

嘖々　サクサク。口々にいひはやすさま。

つた。

「若し歸途に又泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい。」

と賴んで置いた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得たので、取るものも取敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の春海は十八の若盛りで、早くも別室にくつろいでゐた。　衞士は仄暗い行燈の下に、舜庵を引見した。

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衞士は、當年六十七歳、その大著なる冠辭考・萬葉考なども既に成り、將軍有德公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、その名嘖々たる一世の老大家である。年老いたれども頗ゆたかな此の老學者に相

契沖　眞言宗の僧。大阪に住す。國學者。元祿十四年歿。年六十二。（一三〇〇―一三六一）

ゆくりなき　古事記三卷。神代より推古天皇の朝までの事を記す。元明天皇の朝に太安麻呂の記せしもの。

對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を溫和な性格に包んでゐる三十四歳の壯年、而も彼は二十三歳の時、京都に遊學して醫學を學び、二十八歳にして松坂に歸つて、醫を業としてゐたが、京都ではたゞ醫術を學んだのみでなく、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いて、その計畫を語つた。　老學者は若人の言を靜かに聽いて、懇にその意見を語つた。

「我固より神典を解き明らめんとの志であつたが、それには先づ漢意を清く離れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。

萬葉　萬葉集。

古の意を得んには、古の詞を得た上でなければならぬ。古の詞を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それ故自分は專ら萬葉を明らめて居た間に、かくも年老いて、殘の齡はいくばくも無く、神典を說くまでに至ることを得ない。御身は年盛りで、ゆく先が長いから、怠らず勉めさへすれば、必ず成し遂げられるであらう。併し世の學に志す者は、とかく低い處を經ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。かくては低い處をさへ得ることが出來

本居宣長の舊宅

潛戸　クゞリド。

律儀者　リチギモノ。實直なる人。

夜なべ　夜間の仕事。

村田傳藏　眞淵の門人。坂大學の通稱。

ぬのである。此の旨を忘れず、心にしめて、まづ低い處をよく固めておいて、さて高い處に登るがよい。」

と諭した。

夏の夜は早くも更けて、家々の門の皆閉され果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、闇夜の道の何處を蹈むとも覺えず、中町の通を西に折れ、魚町の東側なるわが家の潛戸をはいつた。隣家なる桶利の主人は律儀者で、いつも遲くまで夜なべをして居る。今夜もとん〳〵と桶の箍を入れてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には何の音も響かなかつた。

舜庵は、その後江戸に便りを求め、その翌年の正月、村田傳

うけひごと　誓約の詞。
縣居　アガタヰ。眞淵の家の號。
寶曆十三年　後櫻町天皇の御宇。（二四二三）

藏が中にはひつて、名簿を捧げ、うけひごとをしるして、縣居の門人錄に名を列ねる一人となつた。爾來松坂と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、此は答へた。門人とは云へ、その相會うたことは僅かに一度、唯一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を距る百七十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯南郡松坂中町なる新上屋の行燈は、その光の下に語つた老學者と若人とを照らした。而もその仄暗い燈火は、我が國學史の上に不滅の光を放つてゐるのである。

いわけなき兒　幼き子。
たのめて　たのみにして。

五　隨感二題

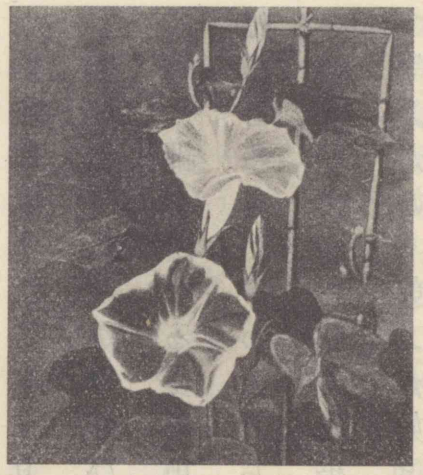
一　朝顏

朝顏を植ゑたる日より、芽ざすを待つは、子を育つる親の心もかくやとばかり思ひ知らる。二葉よりいや葉生ひ出で、いと細やかなる蔓の、垣ほに取りつくさまは、いわけなき兒の、ものをたのめて立ちそむるに似たり。蔓稍〻肥え葉いよいよしげりて、此の蔓彼の蔓に添ひ、彼の蔓此の蔓を卷きて、爭ふが如く競ふが如きは、路に惑へるものを案內するさまあり。あるは登らむとするものゝ手をとりて引上ぐるさまなど、繪にも巧めるものをや。

おのがじし　めいめい。

まだきに　早くから。

花は其の日其の日に色かへて、おのがじしに染めなして、夙に起くるを勸むるに異ならず。しのゝめの今日明け行くほど、露を含みたるが、そよ吹く風にもまれて、おもげに起きあへず、ふりこぼせば、こなたの花の、その露をうけて、しづくも漏らさゞる、すべて君臣相いつくしみ、父子相あはれみ、夫婦相むつび、兄弟相扶け、朋友相親しむにひとし。



朝顔

人の世に在るも、この花の如く、其の日其の日を營みなば、盛りもいとながく久しからむと、まだきに起出で、東雲の曙

柳澤淇園　名は里恭。大和國（奈良縣）郡山藩の家老。寶暦八年歿。年五十三。（一三六六―二四一八）

雲萍雜志　四卷。柳澤淇園の隨筆。

志ある者は云々　後漢書、光武帝の言。

をなぐさみ侍りぬ。

二　立志

學問は先づ志を立つるを以て本とす。志とは心のゆくところなり。道を知り行ひて君子に至らむと思ふ心、常におこたりなく、念々やまざるを志を立つるといふ。志たゝざれば學ぶ事成就せず。故に古人も「志ある者はその事つひに成る。」といひ、又「志立つは學の半ばなり。」といへり。たとへば弓射る者の的に志し、道ゆく者の宿りに志すが如し。よろづの事先づ本をつとむべし。志を立つる事は大にして高くすべし。小にして低けれ

（柳澤淇園―雲萍雜志）

小成に安んず

世俗

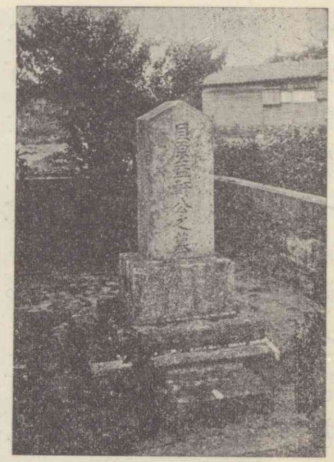
謙德

貝原益軒
名は篤信。筑前（福岡縣）の人。正德四年歿。年八十五。（一二九〇―一三七四）

大和俗訓
貝原益軒の通俗教訓書。

ば、小成に安んじて成就し難し。天下第一等の人とならむと平生志すべし。世俗と同じく、賤しく低くすべからず。

かく志を立てゝ、日に月に努め行はゞ、久しくしてその功積りて、必ず人に優るべし。上を學べば中に至り、中を學べば下に至る、下を學べば功をなさず。又心は小にして低くすべし。心大なれば、驕りて慎みなく、高ければ、人にたかぶりて謙德を失ふ。



貝原益軒の墓

（貝原益軒―大和俗訓）

輕井澤
長野縣北佐久郡にある町。

黴
カビ。

六　晩秋

宵闇の空にまう雁の聲が聞えるやうになつた。飛行機などが時々空中を轟かすので、雁の飛ぶのも少くなつたやうにも思ふが、それでも渡り鳥はまう空を渡つて來るやうになつたのである。

さういふ時節が來た。この夏は、避暑にもゆけず忙しく働いて居り、輕井澤へんに避暑してゐる友などから繪葉書などをもらふと、ひとり寂しく思ふこともあつたが、雨が頻りに降續いて、盛夏も盛夏らしくなく、書物にも著物にも黴が吹き、梅雨時の再現らしき日が續いたかと思ふと、何時の

立秋　大暑の次の氣節、秋のはじめ、陽曆八月七日頃。

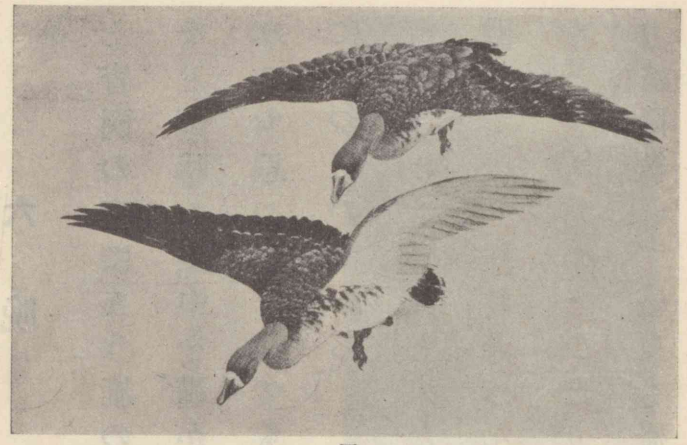
蟋蟀　コホロギ。

秋の彼岸　秋分の前後三日をいふ。

愁眉を開く

間にか立秋になつてしまつた。

そのうち蟋蟀などが鳴いて、秋の彼岸になつた。夏の休暇中元氣を盛り返した人々も勤勉に立働き出したが、夏の休暇中休む暇のなかつた人々も、何か新鮮な爲事にありついたやうな氣持になつて立働いてゐる。蠶の出來も惡く、田畑も不作だらうといふ心配が、一時人々の心を領してゐたが、美しい天氣が幾日も續いて再び愁眉を開くやうになつ



雁

病雁の　病雁の夜寒に落ちて旅寢かな。

舶來　花鳥風月

沈滯　しづみとどまること。

感覺　現實

た。栗の實も金に色づいて微笑んで落ちた。

雁の聲はもの哀れである。それであるから、古人もこの聲に心を潛めて詠歎した。それらの詠歎は詩として今に殘つてゐるから、僕等は現今その詠歎に接することが出來る。芭蕉の「病雁の夜寒に落ちて」の句の如きは、今もなほ僕らの身に沁み徹るのを覺える。

舶來の近代主義は、西洋流であつたから、花鳥風月を除去しようとし、風流は一顧の價もないものとせられたことがある。しかしこれも總ての沈滯の氣を破るのに利目があつたと僕は思ふ。

たゞ、雁の聲の味はひは、これを直接の感覺にうつたへ、現

實のものであると飽くまで理解することによつて、はじめて古人の感情と竝行して行くことが出來るのであらうか。

一日の勞働を終へ、少くとも一時のゆとりを得た時に、それであるから、僕等は雁の一聯を小手をかざして見てゐるミレエの畫境にも參入することが出來るのであつて、これは必ずしももはや一通りの陳腐ではない。況して此處は佛蘭西ではなく、汀の葦に霜の烈しく結ぶ國柄であることを、僕は今思ふのである。

（齋藤茂吉―念珠集）

神無月十日山邊をゆきしかば虹あらはれぬ山の峽より

（齋藤茂吉）

ゆとり　くつろぎ。餘裕。

ミレエ　Jean Francois Millet フランスの農民畫家。

陳腐

齋藤茂吉　醫學博士。歌人。山形縣の人。明治十五年生。

花園神社　東京市四谷區三光町にあり。

百日紅　サルスベリ。千屈菜科の落葉喬木。

簇生　むらがり生ふること。

環堵蕭然　クワントセウゼン。

七　田園雜興

大町桂月

みづから世を避けて門を鎖すとにはあらねど、片田舍に住めば、來り訪ふもの自ら稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街を離れて一宇の茅屋建てり。屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、その間に簇生す。四顧たゞ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する處なり。

われ年來病軀を抱けり。我が志を伸ばさんには、まづ我

志業　めざす事業。
緒に就かず

が體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到り及ばず。啻に我が心に適するのみならず、また我が體に適するを以て、居を此處に定めぬ。都門より歸り來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒飛來りて我が手の風呂敷包に取りすがる。例として土產の菓子のあらんことを期するなり。さるにても、我が志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬるこそ恥づかしけれ。

蒸暑き夏の夕べ、涼み臺を無花果樹下に移して、一家晩餐に團欒すれば、竹葉戰ぎて涼氣自ら盤上に逝る。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つ。いま一

喪家の狗　新たに死人ありし家の犬。孔子家語に、「纍然トシテ若シ喪家之狗ノ。」とあるによる。

一泓　イチワウ。

蠑螈　有尾類の兩棲動物。

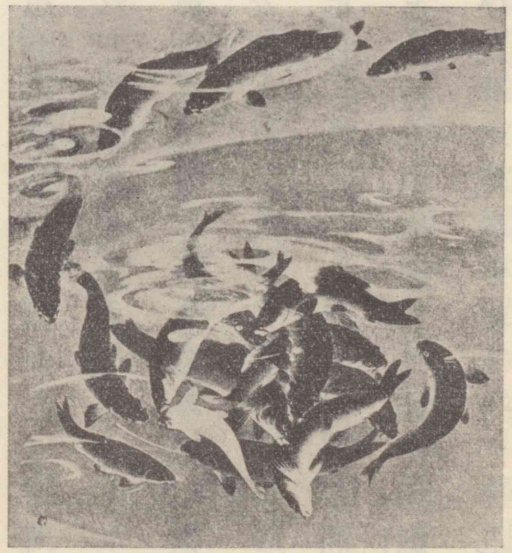
つ、一匹の犬常に食時をたがへず來りてかしこまる。これ近隣の家に飼へるものなり。その主人、近頃、妻子を殘して病死せり。喪家の狗の譬、思ひ出されてあはれなるまゝに、殘肴を投與ふるを常とすれど、貧家の廚、魚なきこと多し。馬鈴薯など與ふるに、たゞ鼻先にて嗅ぎたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

一泓の池水、二間四方に足らざるばかりなれど、清水涌出でて、流れて田に注ぐ。もとは朽木、中に滿ちて、蛙や蠑螈の棲處となり、岸には雜草おひ茂りて見るかげもなかりしが、草を刈り、朽木を取りのけ、蠑螈を捕へ出すこと七八十に及び、水始めて澄みて鏡の如くなりぬ。池邊に立ちて眺むる

に、蛙・蝋・螈のみと思ひの外、長さ一尺ばかりの鯉魚ありて泳ぎ廻り、人の足音聞きては穴深く潜みゆく。大兒と中兒とこれを見て興がり、今少し鯉を入れよと言ふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及べり。白や、緋や、黑や、碧水に一種の模樣を描き、或は集り、或は散じ、時には水面に喰喁し、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋の上に立ちて、これを眺め、これに餌をやること、三

喰喁（ケンギョウ）。魚の口を水上にあらはし呼吸をなすこと。

獨木橋



魚紋　川端龍子筆

兒にとりてはこの上もなき慰みなり。

覺束なげに「とゝとゝ」と呼びて、雞に餌を與ふることも亦小兒が慰みの一つなり。家の四方に散在せる雞、この聲を聞きて喜んで來り集り、先を爭うて食ふ。雄三羽、雌七羽あり。種類も一ならず。就中鬪雞（しゃも）の雌一羽、最も慓悍なり。餌を貪ること最も甚しく、近寄るものの頭を嘴にてつゝくさま、如何にも憎氣にて、他の雞恐れて敢へて近寄らず。されど最も大にして好き卵を產むは、この鬪雞なり。

我平生、物累（ワズラ）ひなきことを期すれば、身には惜しき物を帶びず、家にも惜しき物を置かず。身邊の物品、總て用を便ずるを以て足れりとす。一室の中、粗末なる机と書物との外

鬪雞

慓悍（ヘウカン）。すばやくしてたけきこと。

あどけなし

塗抹
トマツ。

には、又他の物なし。雞、遠慮なくも座に上り來り、机上に立ちて鳴くことあり。護謨靴はきて庭に遊べる小兒、いつの間にやら靴のまゝ上り來ることもあり。されど、雞上らば追ふべきものと心得て、おのれは靴のまゝ上り居りながら、兩手をひろげて雞を追出すもいとあどけなし。末の兒はまだろくに口も利かれぬばかりの年頃なり。母の乳に飽けば、をり〳〵我が机邊に來る。我坐すれば兒も坐し、我横になれば兒も横になり、我書を開けば兒も書を開き、我筆を執れば兒も筆を執る。あまりにおとなしきに、不圖心づきて見れば、折角我が書きたる原稿を塗抹せることあり。

夕闇の端居に、裏の田より竹林を越して、二つ三つの螢飛

蜀を望む
貪りて足ることを知らざる意。後漢書に、「人苦シム無ケレ足、既ニ得レ隴ヲ望レ蜀ヲ。」とあり。

來るを見て、あれ捕へよと兒の請ふまゝに、これを捕ふれば、蜀を望むのならはし、田に行きて多く捕へてよと請ふ。田に行けば螢多し。忽ちの間に數十匹捕へつ。俄作りの螢籠に入れて打興じたる兒等も、やがて蚊帳の中に入り、枕邊の螢光いよ〳〵涼し。

園中、兒を喜ばしむるものは梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蜻蛉なり。此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば唯嬉しきなり。慾もなし、名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、初めはその愛すべきを覺え、終にその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には何等かの神異の潛めるが如く思はる。而して小兒は人類

子を持つて云々　俚諺に、「子を持つて知る親の恩。」とあるによる。

古稀　コキ。七十歳のことをいふ。

苦楚　クソ。

小春日和

親を思ふ云々　吉田松陰の歌に、「親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらむ。」とあるによる。

の中にて最も自然に近きものなり。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら知らるべくや。

樂しき我が團欒にも、なほ一點の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や、齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、我と相住むことも前後僅かに十餘年に過ぎず。末年、我と相住みて小康を得たるは、なほ一年中の小春日和の如きか。然るに、我が病弱の身は、その小春日和をさへ時雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身なるを氣遣ひ、我が食少きを心配す。さればこそ「親を思ふ心にまさる親心。」と詠じけめ。世に、子の病ばかり親の心を痛ましむるものなし。罪深きかな。抑〻不孝の子なるかな。昔は

廉頗　レンパ。趙の名將。史記に、「一飯斗米、肉十斤、被レ甲上レ馬、以示二尚可ヲ用一。」とあり。

健啖　ケンタン。大食の意。

大町桂月　名は芳衛。文章家。東京帝國大學出身。高知縣の人。大正十四年歿。年五十七。

廉頗老いてなほ用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名故、我は親故に強ひて餐を加へ、久しく絶ち居りし晝食さへものするに到りぬ。食進むやうになりて、嬉しとて、母の喜ぶさまを見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。

（大町桂月―桂月全集）

さしのぼる朝日に君を思ひ出でむかたぶく月に
われを忘るな　（藤原通俊）

父のみの父いまさずて五十年に妻あり子ありそ
の妻子あり　（楫取魚彦）

内藤鳴雪
名は素行。俳人。愛媛縣の人。大正十五年歿。年八十。

玉川
源を山梨縣に發し東京府及び神奈川縣を流れ下流は六郷川となり東京灣に注ぐ。

八　絲瓜の棚

内藤鳴雪

元日や一系の天子不二の山
初幟此處にも日本男兒あり
矢車に朝風強き幟かな
大船の白帆干したり五月晴
月がさす厠の窓やほとゝぎす
玉川の一筋光る冬野かな
夕立にうたるゝ鯉のかしらかな

正岡子規

畫顏
旋花科。旋花屬の多年生草本。

絲瓜
ヘチマ。葫蘆科に屬する一年生の蔓草。

緣に干す蒲團の上の落葉かな
玄關に畫顏咲くや村役場
一群の鮎目を過ぎぬ水の色
枯れつくす絲瓜の棚のつらゝかな
行く年を母すこやかに我病めり

夏目漱石

菜の花の中の小家や桃一木
叩かれて畫の蚊を吐く木魚かな
藪蔭や魚も動かず秋の水
茸狩や鳥居の赤き小松山

伊達政宗　武將。寛永十三年歿。年七十二。（一二二五―一二九六）

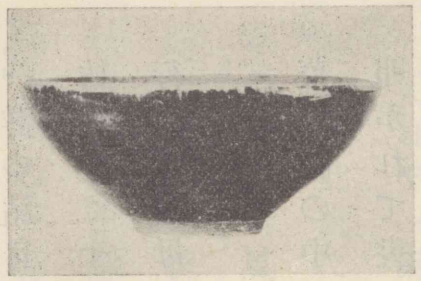
利休　千利休。名は宗易。茶道の祖千家流の元祖。天正十九年歿。年七十。（一一八二―一二二五一）

天目　支那建安の天目山の產をはじめとす。日本の禪僧の持歸りし爲この名起る。

釉　クスリ。陶器にかけて光澤を生ぜしむる藥。

九　名器を毀つ

伊達政宗が、或時家に傳へた名物茶碗を取出してゐたことがあつた。



天目茶碗

太閤秀吉が自分の好みから煽り立てた茶の湯の流行は、奥州の荒くれ男をも捉へて、利休の門に弟子入をさせ、時折はせう事なさの退屈しのぎから、茶器いぢりをさへさせるやうになつたのだつた。茶碗は天目だつた。紺青色の釉のなかに、寶玉のやうに九曜星の美しい花紋が、茶碗の肌一面に光つて

窯變り　カマガハリ。燒きの尋常ならざること。

動悸　ドウキ。

ゐた。政宗は、持前の片眼に磨りつけるやうにして、この窯變りの不思議を貪り眺めてゐたが、つひうつとりとなつたまゝ、危く茶碗を掌面より取落さうとした。

政宗ははつとなつて覺えず膽を潰した。

伊達政宗

「金二千兩もしたものぢや。壞してなるものか。」

こんな考へが電光のやうに彼の頭のなかを走つた。幸に茶碗は、膝の上で巧く兩手の掌面に抱きとめられてゐた。政宗は冷汗をかいた。胸には高く動悸が鳴つてゐる。

「おれは娘つ子のやうにおつ魂消たな。――恥づかしいことぢや。」

政宗は、その次の瞬間さう思つて、悔しさに身悶えした。咄嗟の場合、器の値段を思ひ浮べて胸をどきつかせたのが、何としても堪へられなく厭だつた。

いつだつたか、政宗は徳川家康に茶の饗應を受けたことがあつた。その折家康は、湯を汲み出さうとして、何心なく釜の蓋へ手をやつた。蓋は火のやうに熱してゐた。あまりの熱さに家康は小兒のやうに、

「おう、熱う……」

と叫んで、釜の蓋を取離したかと思ふと、慌てゝその手を自

咄嗟　トツサ。

分の耳朶へやつた。その様子が如何にも可笑しかつたので、政宗は覺えず、

「うふ……。」

と吹出してしまつた。

家康はそれを聞くと、また氣をとり直して、前よりは熱してゐたらしい釜の蓋を、平氣で撮み上げた。そして何事もなかつたやうに、靜かに茶を立てにかゝつた。

政宗はいつに變らぬ家康のねばり强さに感心させられた。が、それでも腹のなかでは、若し俺だつたら、初めに手に取上げたが最後、どんなに熱くたつて釜の蓋を取落すやうな事はしまいと思つた。

耳朶

顔から火が出るやうな氣

政宗は今それを思ひ出した。そんなに心上りしたことを考へてゐた者が、今の有樣はどうだつたかと思ふと、顔から火が出るやうな氣がした。誰だつたか知らないが、自分の耳近くにやつて來て、

「うふ……。」

と冷かすやうに吹出したらしい氣配を、政宗は感じた。

逆上し易いこの茶人は、かつとなつてしまつた。彼は鷲掴みに茶碗を片手にひつ掴んだかと思ふと、いきなりそれを庭石目がけて叩きつけた。茶碗は音を立てゝ、粉微塵に碎け散つた。

「は、ゝ、ゝ、……。」

政宗は聲高く笑つた。彼はその瞬間、金二千兩の天目茶碗を失つた代りに、自分の心の落著きをしかと取返すことが出來たやうに思つて、昂然と胸を反らした。

（薄田泣菫―草木蟲魚）

アメリカのウッド將軍が、小學校に通つてゐた頃、ある時教師の一人が將軍の名を呼んで起立させた。

「あなた、何でもいゝから短い文句を一ついつて御覽なさい。そしてそれをどんな風にいひ換へたら、命令法になるかためして見ますから、」

「馬が車を引いてゐます。」

少年は鸚鵡返しに短い文句をいつた。後々は名高い將軍になるだけあつて、すぐに馬を思ひ浮べたらしかつた。

「よろしい。それを命令法にいひ換へると……。」

未來の將軍は、腹一ぱいの聲でわめいた。

「前へ――おい。」

（薄田泣菫―猫の微笑）

内藏助
大石良雄。
内匠頭長矩
淺野長矩。
城代家老
家老のうち大名の留守中に其の居城を守り、兼ねて一切の政事を掌るもの。
昌平
樣に依つて胡蘆を畫く
たゞ舊に倣ふのみにて、すこしも自ら新工夫をなさゞること。
恬澹
テンタン。

一〇　畫行燈

内藏助は、十九歳にして出仕してから、内匠頭長矩に事へ、所謂城代家老として概ね赤穗に在住した。それで藩政の大事は、此の人の預り聽くべき所であるが、世は昌平の眞中である。一切のことは、樣に依つて胡蘆を畫くに過ぎない時代である上に、其の性恬澹にして、自ら用ひぬ人であるから、餘り政務にも關はらぬ。のみならず君侯の前に出でても、其の才智を振廻はさないから、内匠頭もさほどの人物とも思はれず、却つて吏才に長じた當世向の大野九郎兵衞などの方が、萬事幅を利かして居た。併しながら内藏助に在

佩弦齋
本名は青山延光。水戸藩の儒者。四十七士傳を作る。
五井蘭洲
名は純眞。大阪の儒者。
瑣語
五井蘭洲の書きし書物の名。
韜晦
回護
過失を辯護すること。

つては毫も是等の事を意に介しない。佩弦齋は五井蘭洲の瑣語に由つて此の人を敍し、「常に韜晦して露さず。人皆斥けて癡と爲す。」といつた。「韜晦して露さず」とは回護の筆で、内藏助は殊更に韜晦して居たのでも何でも無い。

大石良雄銅像

其の實は天性の儘で、不必要な場合に悧巧めかさうとしなかつたのみである。が、人皆斥けて癡と爲すといふ一事は、其の通りであつたらしい。當時誰言ふともなく畫行燈と

五蘭島貞保藏若虛書

いふ綽名を此の人に附けた。晝行燈とは、その狀をもつともよく現したものである。いづもぼんやりして、白晝の行燈の火を看るやうな有樣が、今から回想せられるのである。

「君子有盛德、而容貌如愚。」の聖語、內藏助に於てこれを看るといはなければならぬ。顧ふに「晝行燈」の綽名をば、內藏助自らも微笑して甘受して居たに相違ない。

君子云々　史記に出づ。

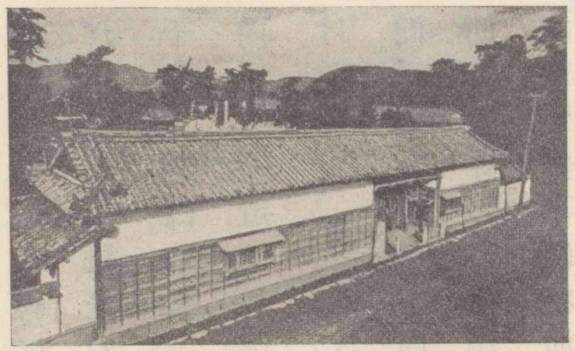
さりながらリンカーンが言つた通り、人は或時と或場合には欺かれるが、長き時と廣き場合には欺かれぬ。內藏助如何に恬澹でも、謙讓でも、天分の斤量は、長き歲月の間に何時となく自然に現れる。彼が一代の英雄であつたのは、事變後に至つて始めて知れたけれど、兎にも角にも何と無く

リンカーン　Abraham Lincoln　北米合衆國第十六代の大統領。

偉い、何處にか信賴すべき所のある人だといふことは、事變を待たずして既に赤穗の上下に信ぜられて居たらしい。

室鳩巢は此の人を傳して、「良雄、人となり簡靜にして威望あり。甚だ國人の爲に倚賴せらる。」といつたのは、まことに簡にして要を得た言であると思ふ。

室鳩巢　名は直清。幕府の儒官。享保十九年歿。年七十九。（一三一六―一三九四）



大石良雄の舊宅

事變に先だつ事八年前、元祿六年の十月、備中松山五萬石の城主、水谷出羽守勝美俄かに卒し、十一月に至り、其の養子勝淸も亦續いて歿したので、一族郎等相議して、出羽守の弟三上主水勝時に家督相續の事を

備中　岡山縣の一部。

松山　岡山縣岡山市を距る約四十粁の所に在り。

新知　新らしき領地。

樽俎折衝　ソンソセツショウ。

英物

願ひ出た。されど家主卒後の養子を免さぬのは、當時の法制であるから、終に聞屆けられず、十二月其の領地を沒收された。尤も祖先の功勞を思し召され、主水に更めて新知三千石を賜はつた。此の際幕府からは、御目付堀小四郎・駒井内匠を差遣され、淺野内匠頭長矩には、特に收城使を仰せ付けられた。それで翌七年二月、内匠頭は一隊を引卒して發向せられたので、内藏助も隨行した。扨、松山に達して、内藏助は水谷の家老鶴見内藏助に會見し、樽俎折衝其の宜しきを得て無事に城池を開渡させた。このことが頗る當時の風評になり、赤穗には大石内藏助といふ一英物が居るといふことが、識者の間に看取せられるやうになつた。

吉良　吉良義央。

上杉　謙信の養子景勝の後裔。當時の主綱憲は吉良義央の子。

福本日南　名は誠。新聞記者。大正十年歿。年六十五。

幕府が赤穗の城池公收に、近傍諸侯の兵を繰出させたのも、吉良・上杉の兩家が非常の警戒を加へたのも、此の邊の消息を探知して居たのが其の一因であらうと察せられる。さも無ければ、一個のぼんやりの晝行燈を、それほど氣にする必要も無い筈である。

（福本日南―元祿快擧眞相錄）

ものゝふの臣の男の子はかゝる世になに床の上
に老いはてぬべき　（久坂玄瑞）

あづさ弓おしてはるかにはなつ矢の矢筋正しき
ものゝふの道　（小山田與清）

死生の境
從容自若
ゆつたりとしてものごとに動ぜぬさま。

天稟
テンピン。うまれつき。

徳川光圀
水戸藩第二代の主。

一一　膽力の錬磨

大丈夫と生れたからには、死生の境に出入しても、從容自若として更に動じないだけの膽力は持ちたいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き、危岩頭上に崩れ懸つても、悠然と澄ましてゐることが出來るが、膽力のないものは、天井から鼠の糞が落ちても、膽を冷し色を失ふやうなことになるものである。

膽力はその人の天稟にもよるが、また決して修養せられぬものではない。上杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれて門番所の板敷の下に潜伏しながら眠つて居たとか、徳川

ネルソン
Horatio Nelson　英國海軍の名將。トラファルガーにフランス艦隊を破る。（一七五八―一八〇五）

魁偉
クワイヰ。堂々たる體格。

掩護物

光圀が六歳の時、暗夜に刑場に往つて死人の首を取つて來たとか、ネルソンが幼時から恐怖の何物たるかを知らなかつたとかいふのは、皆天稟と見るべきものであるが、修養によつて剛膽の人となつた例も亦決して少くない。

昔、武田信玄の部下に、岩間大藏左衞門といふ武士があつた。其の容貌は魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、其の性質は至つて卑怯であつた。信玄は、どうかしてこれを矯正しようと考へて、或日の戰に彼を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて一歩も身動きの出來ないやうにして置いた。矢丸は雨のやうに飛んでくる、砲聲は雷のやうに轟く。彼はその怖ろしさに、殆ど死人の

飜然

過大視

やうになつてしまつた。しかし幸にも一つも矢丸が中らなかつた。そこで、彼は飜然として、運さへあれば矢丸も中らない、死は決して畏るべきものではないと悟つて、それからは戰爭ごとに勇を振つて前進し、遂に武名を揚げたといふことである。

大藏左衞門が戰を恐れたのは、彈丸雨飛の危險を過大視したからである。これは戰爭のみならず多くの場合によくあることで、危險・災害の身に迫つた時、直ちにその結果を過大に豫想して恐怖狼狽するのは、神經質な人ほどあり勝のことである。ところが、平素修養あり、經驗あるものは、決して恐怖狼狽することはない。消防夫が炎々と燃えあが

狂瀾怒濤　キヤウランドタウ。

怯懦　ケフダ。

る猛火の中に泰然として立つのも、水夫が狂瀾怒濤の間に自由に働くのも、皆鍛錬と經驗とに依つて得た自信と覺悟とがあるからである。だから、なるべく多くの鍛錬と經驗とを積むことは、膽力養成の有力な方法である。

次には、あきらめるといふ心の持方が必要である。危險・災害等の來る場合に、なるべく安全に避けようとするのは、人の眞情には相違ないが、それが爲に却つて怯懦に陷ることがあるものである。最も惡い結果を身に引き受けても、是非に及ばぬと覺悟すると、膽は自然にすわるものである。例へば眞劍勝負をする場合に、まづ身を捨てる覺悟を極め、自分の骨を切らせて敵の命を取るといふ風に、死身になつ

禪學　禪宗の教。

瓦解

た上で、手段と技倆とを盡す方が、命を惜しむ者よりも自由が利くから、自然數倍の働をすることが出來る。

勝海舟は膽力に富んだ人で、白刃を蹈みながら、談笑の間に天下の大事を決した英傑であるが、自らその膽力を禪學と劍術とに依つて養成したものと信じて、左の如く語つて居る。

「自分は殆ど四箇年の間、禪學と劍術とを眞面目に修業したが、德川幕府瓦解の時分、萬死の境に出入して、終に一命を全うしたのは、全くこの二つの功であつた。度々刺客かなんかに脅かされたが、何時も手取にした。この勇氣と膽力とは、畢竟この二つに養はれたのだ。危險に際會

措置顚倒　ソチテンタウ。

坦懷　心にわだかまりのなきこと。

綽々　シヤクシヤク。

して逃げられぬ場合には、まづ身命を捨てゝかゝつた。さうして不思議にも死ななかつた。こゝに精神上の一大作用が存するのだ。急に勝たうとすると、忽ち頭熱し、胸跳り、措置顚倒し、進退度を失するやうな患を生ずる。又遁げて防禦の位置に立たうとすると、忽ち萎縮の氣が生じて相手に乘ぜられる。大小の事、皆この規則に支配せられるのだ。自分はこの精神上の作用を悟つて、何時もまづ勝敗の念を度外に措いて、虛心坦懷で事變に處した。それで、小にしては刺客・亂暴人の厄を免れ、大にしては瓦解前後の難局に處して、綽々として餘裕あることが出來た。」と。

海舟は、主として劍術と禪學とで、膽力を錬磨したのである。理窟の上から膽力を養成することは容易でないが、實地の修業において膽力の錬磨せられることは、殆ど人の想像以上であると謂つてもよい。

（嘉納治五郎―青年修養訓）

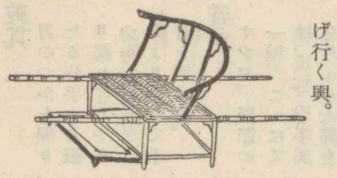
上杉景勝は豪邁にして膽大なり。其の陣に臨むや、前隊既に戰を交へ、矢丸雨下し、呼聲天地に震へども、景勝身なほ幕中に臥し、鼾聲雷の如し。富士川を渡るに、人多くして船小なり。中流殆ど沈まんとす。景勝怒りて舟頭に立ち、鞭を擧げて一揮すれば、衆皆躍りて水に入り、游ぎて渉る。船乃ち岸に達することを得たり。平素未だ曾て喜悅の色を見さず。家に養ふ所の猿あり。偶々景勝の脫ぎたる巾帽を蒙り、走りて庭樹に升り、景勝に向ひて點頭する者三たびす。景勝始めて莞然たり。左右侍御景勝の笑顏を見しこと、唯々此の一事のみといふ。

（近古史談による）

立花道雪　名は鑑連、道雪はその號なり。戰國時代の武將。

種が島の鐵砲　小銃の稱。天文十二年（一二〇三）ポルトガル人の始めて鹿兒島縣種が島にもたらしたるより稱す。

手輿　手にてながえを腰の邊にもちあげ行く輿。



一二　輿上の勇士

立花道雪は大友家に屬す。武勇逞しき人にて、士卒を見る事、我が子を愛するが如し。戰に臨む時は、二尺七寸有りける刀と、種が島の鐵砲とを手輿に入れ、三尺許りの棒に腕貫をして手に提げ乘り、長き刀挿したる若き武士百餘人を手輿の左右に引具し、軍始まれば手輿を此等の武士に舁かせ、棒を取りて手輿を敲き、大聲を上げ、「此の輿を敵の眞中に舁き入れよ。」とて拍子取り、遲き時は輿の前後を敲かれけるに、武士等は敵に背を見するよりも恥として、面も振らず舁入れければ、手輿の左右の武士ども三尺餘りの刀をぬき連

腕貫　刀のつかを握りたる時手より振り離れざるやうつかがしら又は鐔より垂れて手首を通す緒。

音頭　オンド。踊節の一種。こゝにては、道雪の手輿をたゝき大聲をあぐるを指す。

下部　シモベ。雑事に役せらるゝ身分卑しき者。

れて、眞一文字に切つて懸りけるに、先陣の者共、「すはや例の音頭よ。」と言ひも敢へず、我先にと競ひ懸り、如何なる堅陣をも切崩さずといふ事なし。若し先陣追立てらるゝ時は、道雪大音にて、「我を敵の中へ舁入れよ。命惜しくば其の後逃げよ。」と、眼をむき出して下知せし程に、もり返して勝たずといふ事なし。かゝれば道雪の士は、一日に幾度槍を合はせたりといふ者なし。又道雪常に、「士に弱き者は無きものなり。若し弱き者あらば其の人の悪しきにはあらずして、其の大將の勵まさざるの罪なり。我が士はいふにや及ぶ、下部に至りても度々功無きはあらず。他の家にて後れたる士あらば我が方に來り仕へよ。取換へて逸物にせむ。わ

拔驅　ヌケガケ。ひそかに陣營をぬけ出して先驅すること。

ひるむ　よわる。

武具　兵器の總稱。

が士の四月朔日左三兵衞は、若き時後れし事のありしに、何時の頃よりか血臭き事に會ひて、次第に物に慣れ、今は五六人の剛の者と世に言はるゝぞかし。」とて、偶〻武功無き士のあれば、「明き塞ぎのあるは武功の事よ。汝の弱からざるは我見定めたり。明日にも軍に出でむに、人に唆かされ必ず拔驅して討死し給ふな。そは不忠なり。身を全うして道雪を見つぎ給はれ。各〻を打連れたればこそ、かく年老いたる身の、敵の眞中にありて、ひるみたる色も見せざるぞ。」と、いと懇に睦じく言ひて酒酌みかはし、其の頃はやりける武具取出して與へければ、是に勵まされて、重ねて軍のあらむ時は、必ず人に後れじと勇みけり。又聊かも武者振の能く見ゆ

れば呼び出して、「あれ人々見給へ、この道雪が見し所に違ふ可きに非ず。」とて、勝れたる剛の者の名を呼びて「賴み候程に、能く引廻してよ。」と云ひ、又「人々の心を合はせらるゝ事、此の道雪は天の冥加に叶ひたる事よ。」と勇めたて、若し若き士の席上にて心得違ひたる事のある時は、客の前などに呼出し打笑ひ、「道雪が士、不束にこそあれ。されども軍に臨みて火花を散らし候槍は此の人々こそ能くすれ。」とて、槍おつ取りたる眞似して譽められしかば、人々感じ涙を流し、此の人の爲に命を捨てむと勵み合ひけり。

（湯淺常山―常山紀談）

冥加　ミヤウガ。

一三　朝の海

松風の音であらう。遠い時雨を思はせるほどに微かな夜明けの風が、屋島の浦々から峰へ〳〵と吹きあげて來るらしい。時としては浦波の如く、時としては遠ざかり行く沖の大波の如く、窓近く訪れては、はたと跡絶えてしまふ。ぢつと眼をつぶつて松風の音を聽いてゐると、昨日屋島寺の薄暗い御堂の中で觀た重盛の燈籠や、景清念持佛の尊い御像や、何彼と浮んで來るのであつた。潮に濡れた鎧に美しく描き出された秋草の、さながらに色もあせず見出さるのも、むかしを思うて哀れであつた。昨日屋島寺を出る

屋島　香川縣高松市の東方に在り。

屋島寺　屋島にあり。眞言宗を奉ず。源平合戰の古器を傳ふ。

重盛　平重盛。清盛の子。

景清　平氏の臣。惡七兵衞と呼ばる。

鐘樓　ショウロウ。

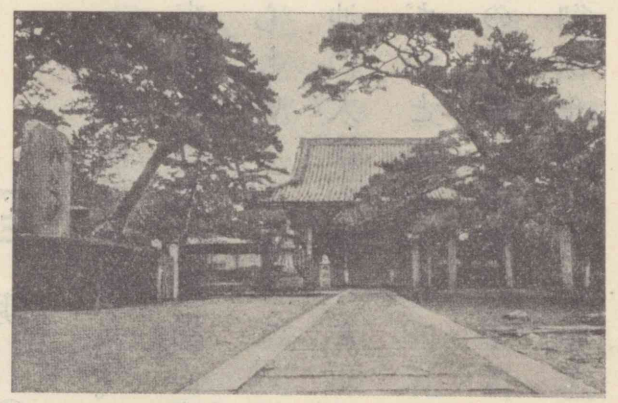
カーテン　Curtain　窓掛。

たゆたふ

櫓　ヤグラ。城壁又は城門の上に築きたるたかどの。

山駕籠　竹にて編みたる手輕のかご。山路の用に供するもの。

時、暮れゆく鐘樓の下に立つて見送つてくれた僧の姿までが、とほい昔の人のやうに思はれた。私は窓のカーテンを開けた。高松の町は靄に包まれてゐた。夜はなほ高松の町を廻る裾山にたゆたうてゐた。高松城の櫓が汀に沿うて夜明け方の微かな白い光を漂はせてゐた。燈臺の火もまたゝいてゐた。



屋島寺

山駕籠に心地よく搖られながら、松林の間を走る。枯れ〳〵な冬草の間に、野菊の可憐な姿を見出す。一本一本磨きあげられ

大槌島・小槌島・豐島・女木島・男木島　何れも屋島の北西に點在せる瀬戸内海上の小島にして豐島最も大なり。

崇德天皇　第七十五代の天皇。

白峰陵　香川縣綾歌郡松山村なる白峰にある崇德天皇の陵。

小豆島　香川縣の東北にある島。

なごやか

たやうな屋島の赤松の間を、大槌・小槌・豐島・女木・男木の島影が走る。

「崇德天皇の白峰陵といふのは、あのあたりの山になりますが、まだ霧がかけてをりますので……。」

と、駕籠の男たちは、高松の右手の山を指さした。

北嶺に達した頃、小鳥が鳴初めた。小豆島を中心に、瀬戸内海の無數の島々が波の上に浮ぶ。海は煙つてゐる。海は溶けて朝霧に消えて行く。とり殘された燈臺の燭が、薄暗い島蔭にまたゝいてゐる。

長い航海を終へて歸り行く汽船であらう。夜明け方の海は、いともなごやかに、幸福なる汽船を東へ〳〵と見送る。

相迎へ相去る、一つ〳〵の小島に、朝の祝福を投げつゝ船は行く。船は、思ひ〳〵の旅人の心を載せて、朝の海を辷つては島影を縫ふ。海は、明け方の空を映して、五月の山よりも青く、空よりも廣い。

「阿波の鳴門がこの見當でせう。これが須磨・明石……このあたりに雪に包まれた大山が見える筈ですが。」

私は振りかへつて見た。其處にも見知らぬ二人づれの

阿波の鳴門　徳島縣の東北端なる孫崎と兵庫縣淡路島の西南端なる鳴門崎との間なる海峽。

須磨　兵庫縣神戸市須磨區。瀬戸内海に面す。

明石　兵庫縣明石市。瀬戸内海に面し須磨の西に在り。

屋島の海岸

旅人が、朝の海を越えて、中國あたりの山を眺めてゐた。私たちは屋島の嶺に上つて海に面する方へ出た。

「この岬の陰が、船隱といつて、平家が兵船を隱して置いたところださうです。梶原が攻め寄せて來たのは、こゝなんです。」

「那須與一の扇の的が、あの岸のところですよ。」

やゝ波が高くなつて來た。私は、昨日、日の暮るゝ頃、佐藤嗣信の墓に詣でたことを思ひ出した。朝霧の中に洲崎寺、嗣信の墓のあたり、或は總門の跡を眺めながら、船は壇の浦の汀へ近く走る。波は立ちに立ちて旅人の心をぬらす。

住みなれし都のかたはよそながら袖に波越す磯の

梶原　梶原景時。源頼朝の臣。

那須與一　源義經の臣。

佐藤嗣信　源義經の臣。

總門　ソウモン。そとがまへの正門。

壇の浦　香川縣屋島の東方に在り。

知盛
清盛の子。

菊王丸
能登守教經の侍童。

鞆町
廣島縣沼隈郡にあり。福山市の南に當り瀬戸内海に面す。

宿縁

松島

新中納言知盛の歌を想ひ出す。私は昨日、日が暮れて遂に菊王丸の墓を訪ねなかつたことを名殘惜しく思つてゐた。今日は、波さへ無ければ瀬戸内海を横切つて、鞆町に出て、京都へ歸る積りであつたが、波が高いために船をやることが出來ない。自然船を屋島の岸に繫いで、再び壇の浦邊を訪ねることになつた。菊王丸の墓に詣ることの出來たのも、何かの宿縁であらう。鹽を燒く小屋のあたりを廻り、やがて港に沿うて走つてくる村の童たちに、菊王丸の墓をたづねた。

「菊王丸さんの墓なら知つてゐるよ。」

能登殿
平教經のこと。教盛の子。

平家物語
平清盛の家を起せしより一族の亡ぶるまでの事蹟を主として記したるもの。

萌葱
モエギ。黄と青との間色。

腹卷
腹に卷きて背に合はす如くに作りたる鎧。

童たちは先に立つて、枯草の中を七八丁も飛んで行つた。

埃の多い道から二三間離れたばかりのところに、蔭深い木立の下に、石を積みあげた塚がある。其の塚の後に、苔蒸したさゝやかな塔婆がある。菊王丸の墓である。「生年十八歳にぞ成りにける。能登殿、この童を討たせて、餘りに哀れに思はれければ、その後は軍をもし給はず、云々。」荒れ果てた路傍の塚の前に佇んでゐると、平家物語の記事がさながらに浮んで來る。萌葱匂の腹卷を著、草摺のはづれを射貫かれて、船中に運ばれてゐるけなげな若武者の姿が映つて來る。

案内してくれた濱の子供たちは、菊王丸の墓をおほふや

まゆみ　にしきぎ科の落葉小喬木、山野に自生す。

吉田絃二郎　名は源次郎。文學者。佐賀縣の人。明治十九年生。

うに繁つてゐる、まゆみの眞つ紅な實をもぎとつては、無心にその數をかぞへてゐた。

靜かな朝の潮を隔てゝ、源平の若武者たちの墓は、霧に包まれて眠つてゐた。海は、微かな松風の音を、旅人の耳に殘して輝き始めた。鳴きつれてゆく千鳥の跡を、ぢつと見送つてゐれば、旅人の心はさすがに沈む。

「大きな汽船だ！」菊王丸の墓のまゆみの實を弄んでゐた子供たちは、濱に立つて叫ぶ。

瀨戸内海を西航する汽船が、沖の小島をかすめてゆく。

（吉田絃二郎の文による）

己が故郷　宮城縣本吉郡。

里子　父君　鮎貝盛房。

一四　七株松

七株松とは、己が故郷の家の庭前に、父君の植ゑ給へる松なり。植ゑ給ひし年月は、明治十五年の冬、霜雪降り凍る時なりけり。その折一封の書を寄せ給へり。その中に、「汝等兄弟どもの齡を祝ひて、七株松を植ゑたり。この松の變らぬが如く、よく霜雪に堪へて、學の道を勵み勉めよ。」とあり。

己が兄弟は七人なり。上には姉と兄と各〻一人、下には弟三人と妹一人とあり。姉一人は家にて育ちしかど、他は皆里子となりて、人の手にて育ちたり。父君はさまで心にとめ給はざりしかど、母君は如何にして、この數多の兄弟を敎

育せんと、常に案じ煩ひ給ひたりとか。明治四年の春ばかり、己と次の弟とを携へて仙臺に上り、それ〴〵學校に寄宿せしめ給へり。一人手を離るれば、母君は暫しも、心を慰め給ふ折なし。その後姉は他に嫁ぎ、己は落合家に養はれ、一人の弟は壹岐家を嗣ぎ、妹は飯田家の養女となれり。家に殘れるは、兄と次の弟とはての弟と三人なり。兄弟の多きは、兄弟そのものの爲には、いふべからざる幸福なれど、親の身に取りては、これより心盡しなるものはなからん。

七株松は、七人の兄弟にちなみて植ゑ給へるものなり。その松は七株とも一處に生ひたれど、我々兄弟は未だ嘗て一堂のもとに會したることなし。己、松岩にありし頃は、二

ちなむ　緣にたよる。

松岩　宮城縣本吉郡松岩村。

人の弟と妹とは里にあり。己仙臺にありし頃は、姉と兄とは松岩にあり。兄來る時は弟去り、妹去る時は姉來るなど、あるは二人、あるは三人、多き時も、四人より多かりしことはなかりしなり。殊に己は、早くより都に上りしかば、兄弟團欒といふ快樂を得ること最も少かりしなり。

同じく十一年、次の弟都に上れり。他鄕にて兄弟に會ひしはこれを始めとす。翌年、その次の弟また上れり。それより二年經て、妹また上れり。されどその折は、次の弟家に歸りてあらず。十五年、次の弟上れり。その折はその次の弟、大阪に行きてあらず。あくる年、はての弟上れり。他鄕にて四人會したるは珍らしなど語り合ふ。二十年、己、根岸

根岸　東京市下谷區に在り。

拂曉
フツゲウ。

に寓居せり。その年の五月、その月の三十日、夜に入りて門を叩く者あり。誰ならんと出で見るに、大阪に行きたる弟なりけり。嬉しと思ひて迎へ入れたり。その弟、養家に急用ありて、明日拂曉、此處を出で立たんの心なりといふ。兄弟五人會せんことは、生れて始めてなり。明日は他の弟と妹とを招かんほどに、一日ほど出立を延ばしくれずやと乞ふ。養父の身にかゝはりたる一大事、とてもさることならずといふ。他の弟妹に知らせずして、そなたを出で立たせんには、後にて恨まれもやせん。よしこれより使を遣らんとて、下谷の車坂、神田の今川小路、本郷の森川の三方へ、手を分けて人を走らす。その時午後十一時少し過ぐる頃なり。

一時間ばかりありて、車坂の妹訪ひ來ぬ。また三十分ばかりありて、二人の弟前後に訪ひ來ぬ。五人一室に會したる其の夜の喜、何にたとへん。維新以後家政衰微して、完全なる教育を受くる能はずなど一人がいへば、兄弟のうちにて最も苦學せるはわれなりと一人がいふ。朝とく起きて栗拾ひたること、夜おそくまで起き居て、凧張りたることなど、幼時より今日までの五人の歴史、悉く談話に上りたるもあはれなり。はては父の恩母の愛など、こまかに語り出でて、父君には七株松を植ゑて、我等兄弟によそへ給へり。さばかり我等を思ひ給へり。一日も早く七人の兄弟打寄りて、膝下に孝養をなさまほしきにあらずやといふ。時に時計

午前四時を報ず。窓押開けて、五人ともに上野の方を眺むるに、杉の梢のあたり、不如歸と啼きたる杜鵑、あるは二聲、あるは三聲。その聲如何におのれ等の腸を斷ちたらん。今なほ記憶して忘れず。

（落合直文―落合直文集）

杜鵑　ホトヽギス。

此の畫は誰をうつせるならむ。しひて名をつけてと望まる。容貌うたがふらくは、陶氏に髣髴たり。されども例の菊なきはいかに。嗚呼、我是をしれり。東籬すでに霜白うして、五株の柳も骨ばかりなる比か。是を更に冬淵明とはいふなるべし。

菊とりし手もふところや霜の朝

（横井也有―鶉衣）

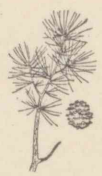
一五　林の道

落葉松の林の道にひとりなりこのたか原のあしたを愛す

裾野路は下りになりて汽車はやし朝かぜにゆらぐ月見草の花

佐久の平ちくま岸田のみづきよみわか苗の間を鯉あそぶなり

自轉車おり片手額の汗ふきくうめの木ゆさぶる此のいたづら兒



落葉松　松柏科に屬する落葉喬木。

佐久の平　長野縣南北佐久郡に亙れる平地。

ちくま　千曲川。源を山梨・長野の縣境、金峰山の北麓に發し佐久平を貫流し犀川と合して信濃川となる。

海の音さそひもてくる眞晝かぜとみにつよくして
嵐だちたり

瀧風のあふりの風にゆさゆさと大きうゆらぐ朴の
葉とちの葉

華嚴
山元春汀筆

道をれて瀧みえずなれりさらさらと足ふむごとに
崩え落つる土

朝山は松風はやし吹きくだる風の下びのにはとり
の聲

（佐佐木信綱）

朴　ホホ。もくれん科に屬する落葉喬木。
とち　とちのき科に屬する落葉喬木。

一六　雪前雪後

雨も好し、露も好し、霰も霙も。天より降るものの面白からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。

降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて、風無き寒さに、雀ふくらむほどは兎もあれ角もあれ、そとおろす風に連れて、ちらちらと降出づる始めより、檐の玉水日に燿ふ光長閑に融け盡す終りまで、いづれかをかしからざらん。

先づ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、樫の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さらさらと降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。

檐
燿ふ　カガヨフ。
をかし　趣のあること。
板庇

鹿の子斑　カのコマダラ。鹿の毛色にある斑の如く殘雪の斑々たるの意。
天華　テンゲ。
未だし
霏々　ヒヒ。
蘆絮　ロジョ。蘆の穗綿。

又春の雪の大きく輕らかに降りて、落つるとやがて色無き水の昔に返る淡々しさも懷かしく、消ゆる〳〵も少しは積りて、茅葺の屋根に鹿の子斑の夏の富士を見せ、松・梅・樅などの梢には、天華俄かに落ちかゝるかと疑はしむるも趣あり。

されど降る最中の雪の、見て美しきは、冬の末掛けて春の初めの頃、陽氣既に動きて、陰氣猶いと盛んなる時のことなり。寒さ甚しからねば、雪細かならず、暖かさ未だしければ、雪は水めかずして恰も好く、且大きく且輕やかなるに、而も一年の中最も降るべき折なれば、其の霏々紛々として盛んに下るに當つては、櫻花の春天に飜るが如く、蘆絮の秋風に

野渡　ヤト。
縹渺　ヘウベウ。
半衢　ハンク。
瓊瑤　ケイエウ。美玉。
蜃樓　蜃氣樓に同じ。
巍峨　ギガ。
鷺毳　ロゼイ。
玉屑　
障ふ　サふ。
渣滓　サシ。

漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虛無に封じて、仙境の縹渺を欺き、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで、蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼もあやに、美しき限りなり。

總て降る時の眺には、廣き處より狹き處好し。玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ、光を障ふるものなれば、降りしきる眞中は、遠きは全く見えずして、却つて狹くなり、近きは聊か霞みて、狹きは却つて廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。

晴れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡して、鏡新に明かなる空の、蒼々と朗かなるが下に、渣滓錬去つて銀

雪後　横濱三溪園

馬をさへ眺む　芭蕉の句に、「馬をさへ眺むる雪のあしたかな」とあるによる。

旦

金閣　京都市上京區にある鹿苑寺の別稱。

銀閣　京都市左京區にある慈照寺の別稱。

眞如堂　京都市左京區にある天台宗の寺。

岡崎　京都市左京區にあり。

栂尾　トガノヲ。京都市の北郊にある山。高尾・槇尾と連なりて三尾と稱せらる。

曇無き地の、皎々と白きが、見る眼もはゆく遙かに開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころ無きだに、面白く思はる。

「馬をさへ眺む」と人の言ひたる旦、朝日の光いと華やかなるに、疎林に禽起つて、飛んで又還る、有りふれたる郊外のさまながらもよし。

西の京は金閣・銀閣・眞如堂・岡崎・東山・清水、皆畫とすべし。栂尾・槇尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。

木曾の寢覺の床の、巖は鬼斧に任せて千古冷やかに峙ち、潭

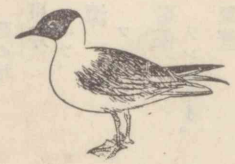
雪の金閣寺

寢覺の床　長野縣西筑摩郡上松町にある名勝の地。
鬼斧　キフ。
潭　フチ。
藍靛　ランデン。
翠蓋　スヰガイ。松の枝の蓋の如くおほへるをいふ。
簪　カザシ。
浮寢の禽
山王臺　東京市麹町區。官幣大社日枝神社あり。
溜池　山王臺の下にありし池。今は地名にのみ殘る。
不忍の池　下谷區にあり。

は藍靛を湛へて、一脈徐に流るゝ雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋稍〻重く、壁の簪を戴ける松のむら立のあたり、姿をも見せで名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなんど、二十年の昔の、今も猶わが胸に鮮かなり。

東の京は、御濠の水穩かに、浮寢の禽の夢も安けく、雪に閑かなる大御代の午、また比ひ無くめでたし。山王臺今猶好からんが、溜池の有りし昔、徒に懷かし。不忍の池、一望千頃の景は言はずもあれ、石橋のさゝやかなるを渡つて、湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たるこれも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れ難き雪の闇夜に、何をか物言ふ、鴨のさゞめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ

敗荷　枯れやぶれたる蓮の葉。
待乳山　マツチヤマ。淺草區聖天町にあり。隅田川に臨む小丘。
相生橋　アヒオヒバシ。隅田川の河口に架す。中央に中島あり。
海鷗　カイオウ。



有りとや言ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流るゝ川なりと稱ふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに劃りて、一幅の畫としたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。

（幸田露伴―洗心錄）

箱根越す人もあるらし今朝の雪　芭蕉
いざさらば雪見にころぶ處まで

日蓮上人　日蓮宗の開祖。安房（千葉縣）の人。弘安五年歿。年六十一。（一八八二―一九四二）
法華經　妙法蓮華經の略稱。支那・日本を通じて最も弘く流布したる大乘經典の一。
高天闊地
豪邁

一七　日蓮上人の人格

高山樗牛

日蓮上人は、獨り鎌倉時代のみならず、日本歷史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は、宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るとも驚かず、法華經の爲ならば此の頭を刎ねらるゝとも悔いじと覺悟し、眼中權勢もなく威武もなき、眞に高天闊地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとて、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しか

四條金吾　名は頼基。
江馬遠江守　名は光時。
不レ惜ニ身命ヲ。
龍口　神奈川縣鎌倉郡に在り。

りしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情、時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

日蓮上人辻説法　野田九浦筆

上人の信者に、四條金吾とて江馬遠江守の老臣ありき。この人、武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟を以て、上人とともに諸〻の迫害を被れり。上人龍口にて斬られんとせし時は、路上

慟哭　ドウコク。
藹然　アイゼン。氣のおだやかなるさま。
島二ツ　壹岐と對馬。

に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は、常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中、「殿にして若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ釋尊手を引き袂を捉へて淨土に迎ふとも、振返つて必ず殿と共に地獄に現ずべし。」との意を述べられたり。その恩愛の濃かなること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一歩も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕淚ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現れたり。殊に晩年、日本六十六箇國、島二つの内に、

身延山　山梨縣南巨摩郡に在り。

池上　東京市大森區池上町。

檀越

波木井氏　南部實長の事。甲斐國（山梨縣）の人。

舍人　トネリ

五尺に足らざる身一つを置く處なくして、身延山の深谷に隱るゝや、九箇年が間、五十餘町の嶮山を、一日も缺かさず、一日に一度は必ず攀登りて、遙かに上人の故鄕なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中に、これと比較し得べき美談ありや。

上人病篤くして、甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣されけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に著きて、波木井殿に送る書の中にも、馬をいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに、「知らぬ舍人を附け候ては覺束なく覺え候。罷歸り候はんまで、この舍人を附けおき候はんと存候。」と、しるされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は、人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ、偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なくば、かの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し、融會して、こゝに豪傑の全人格をつくるなり。かの麗しき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲卽ち刺を織る絲なるにあらずや。

（高山樗牛―樗牛全集）

高山樗牛　名は林次郎。文學博士。山形縣の人。明治三十五年歿。年三十二。

一八　別離

鳴呼忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは、恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客、巾を飜せる友、船上・艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬまでに消え失せぬ。「健在なれ。」「再び早く相見ん。」との別れの言葉は、尚耳に響き、最後の握手、今尚掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗飛び交ふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りにき。嗚呼、かくて相別れたる友、今何處ぞ。彼はその夜、西の方足柄を越えて清見潟のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて別離の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて、五年後の今日此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を辭して復見んに由なく、我をして孤影蕭然、欄に憑りて無限の感に沈ましむ。

「三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて別離の悶を遣りたりき。其の夜月明かに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵、欄に憑りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。」

人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に殘し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。

友　高山樗牛。

埠頭　フトウ。

清見潟　靜岡縣庵原郡興津附近の海岸。

蕭然　セウゼン。

三月云々　樗牛の文。三月は明治三十三年。

函嶺　カンレイ。箱根山のこと。

駿州　靜岡縣の一部。

有渡の山　靜岡縣安倍郡久能山の別稱。
袖師の松原　興津西方海岸の松原。
埋骨の地　靜岡縣清水市龍華寺。
銷魂　セウコン。悲しみて魂のきえいる意。
寒水石　カンスヰセキ。大理石の一種。

かく心を痛ましむるこの夕、有渡の山影かすかにして、袖師の松原、雨の中におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、總て暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如く、欄下渚邊に寄する浪の音も微かなり。此の海、此の地、是、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是、彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼と其の姿とは今や尋ぬるに由なし。昨は、彼が墓邊に櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫で、今夜、五年前の今日の別離を偲んで、彼が遺文に對す。嗚呼、我、此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。されど、徒に憂ふるを已めよ。人に百歳の齡なく、世に別

款晤　クワンゴ。うちとけて交る意。
契緣　關係因緣。
生死幽明

離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂みを深からしめ、懷慕は時と處との隔てを超えて、神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文の餘薫新にして、我が思慕日毎に彼に通ず。

清見灣頭、今宵雨しめやかにして夜靜かなり。形は見えねど、彼は我と語り、我は彼に接し、松風・濤聲、また時に款晤に入り來る。

嗚呼、「平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契緣かある。身世忽忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我と永へに相伴なはん。歳月水とともに流れ去つて、五年の昔を今に返す由なけ

三世　過去・現在・未來の三つの世をいふ。

れども、神相接しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見潟の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡の山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。

（姉崎正治―停雲集）

姉崎正治　嘲風と號す。文學博士。東京帝國大學教授。京都府の人。明治六年生。

かきくらすしぐれの空に白鷺の羽いろさやかに
入日さすなり

（中島廣足）

冬畑の大根の莖に霜さえて朝戸出さむし岡ざき
の里

（太田垣蓮月）

馴染

一九　根の營

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐながら、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、餘り考へて見た事がなかつた。「美しい赤褐色の幹や、わりに色の淺い清らかな綠の葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落著いた、潤のある鮮かさを見せる。綠の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を增して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽かな氣分が、樹の色や光の中に漂うて、如何にも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折節

かはいゝ小鳥の群が、活き〳〵した聲で囀り交はして、綠の葉の間を樂しさうに往き來する。――それが私の親しい松の樹であつた。

然るに、或時私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩してゐる處に佇んで、砂の中に喰込んだ複雜な根を見ることが出來た。地上と地下との姿が、何とひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に竝んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、――それに比べて、地下の根は、戰ひ、もがき、苦しみ、精一杯の努力を盡したやうに、枝から枝と分れて、女の亂れ髪の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれるぐらゐ太い根、細い根が一齊に大地に抱きついてゐる。

簡素

私はこの樣な根が地下にあることを知つてゐた。併しそれを目の前にまざ〳〵と見た時には、思はず驚異の情に打たれぬ譯には行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやうな地下の苦みが、不斷に彼らにあることを、一度も感じたことがなかつたのである。彼の苦みの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼の苦しさうな顏を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。併しその叫び聲や萎れた顏も、その時さへ過ぎれば、すぐにもとの快活に歸つて、苦みの痕をめつたにあとへ殘さない。而も彼らは、我々の眼に祕められた地下の營を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風

痕
アト。

高野山　和歌山縣伊都郡にある靈山。

不動坂　坂の上に不動堂あるを以てこの名あり。

弘法大師　空海。眞言宗の開祖。承和二年歿。年六十三。（一四三三―一四九五）

見識

に吹かれて飛ぶ綠の花粉も、實はこの樣な苦勞の上にのみ可能なのであつた。

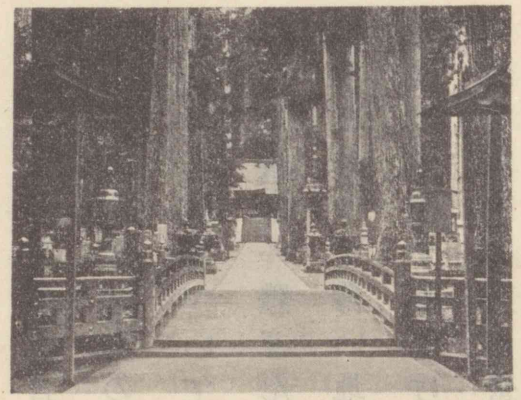
この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親みを感ずるやうになつた。彼らは我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた時に、數知れず立並んでゐるあの太い檜の木から、何とも言へぬ莊嚴な心持を押しつけられた。

なるほどこれは靈地だと思はずにはゐられなかつた。この地を選んだ弘法大師の見識にも、つく〳〵敬服するやうな氣持になつた。

外郭

金剛不壞　コンガウフエ。金剛は金屬中の最も剛堅なるもの。金剛の決して崩壞せざるをいふ語。



高野山

それは外郭に連なる山々によつて、平野から切離された。急峻な山の斜面である。幾世紀を經て來たか分らない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどな、どつしりとした、迷のない、壯大な力强さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた〳〵と人間の肌にも迫つて來る。私は、底力のある興奮を、心の奥底に感じ始めた。

亭々たる巨幹

強靭　キャウジン。

私の眼は、すぐに老樹の根に向つた。地下の烈しい營は、既に地上一尺の處に明かに現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へる爲に、太い強靭な根は、力の限り四方へひろがつて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は、一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雜にからみ合つてゐる有樣は、想像するだけで我々に驚異の情を起させる。確かに烈しい生の力の營によつて、殘る所なく包まれてゐるのである。我々は、それを肉眼によつて見る事は出來なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出來た。隱れ

神祕

敬虔　ケイケン。つゝしみかしこむ意。

た努力の威壓が、神祕の影をさへ帶びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は、老樹の前に、根の淺い自分を恥ぢた。さうして地下の營に沒頭することを、自分に誓つた。今氣づいてもまだ遲くない。

成長を欲するものは、まづ根を確かにおろさなくてはならぬ。

上に伸びることをのみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

早年にして成長の止まる人がある。根をおろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き、豐かな果實を結ぶ人がある。下に喰入ることに沒頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のいゝ頭と、感激の強い心臟と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしない人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒されて、自分のやうなものは生きる値打がないとさへ思つてゐる。しかしそれは彼の根が一つの地殼に突當つて、それを突破する努力に惱んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が、彼の上に起るか。――私は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生れる筈はない。

地殼　地球の外部の岩石にて複雜に構成せられたる部分。

古來の偉人には、雄大な根の營があつた。その故に、彼らの仕事は、味はへば味はふほど深い味を示してくる。

現代には、たとへ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすればそれが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか。如何にすれば珍らしい變種が出來るだらうか、如何にすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、總てがあまりに人工的である。限られた土壤の中で纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸ばすことが出來ない。

天を衝かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生れる筈がない。

纖細　センサイ。

いぢける　畏れ縮まる。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

（和辻哲郎―偶像再興）

一休禪師、紫野におはせしころ、人の書をもとむるものあれば、御用心と書きて與へぬ。しひて他のことを求むる者あれば、御用心御用心といくつも書き給ひ、又上に只といふ一字をそへて、只御用心とかゝせ給ふこともありとかや。いとおもしろく、その語すべての事にかよひて、教訓とはなりにけり。予もまたそれにならひて、用心の二字を合はせて、一字に作り書けり。その文に云ふ、

一寸見れば忍ぶに類し、麁忽に見れば恩にひとし、はるかに見れば思ふに似たり。

（柳澤淇園―雲萍雜志）

和辻哲郎
文學博士。哲學者。京都帝國大學教授。兵庫縣の人。明治二十二年生。

生存競爭
生きながらへんとすることより起るあらそひ。

自然淘汰
外界に適したるものは生存し適せざるものは死滅することをいふ。

二〇　簡單より複雜へ

生存競爭に於ける勝敗の標準は、その時々の事情で違ふから、總ての動植物を通じて自然淘汰の結果を論ずることは出來ぬが、現在の動植物を悉く集めて彼此比較して見ると、大部分に就いては稍〻一定の方向に進む如き勢ひが見える。一定の方向とは、卽ち體の構造が、簡單より複雜に向ふことである。

人間社會の有樣を見るに、野蠻國では、各個人が皆自分の生活に必要な衣食住の用品を造り、一人にて家も建てれば衣服も造り、獵もして、少しも他人の手を借らぬから、一村落

内の人間が、悉く一人づゝに離れても、生活には不自由を感ぜぬ。然るに稍〻開けた國へ行けば、生活に必要な仕事を個人の間に分配し、各個人はたゞその擔當の業務のみに力を盡し、家を建てる者は常に家ばかりを建て、他人の分までも建てる代りに、衣服食料は他より得て生活し、また衣服を造る者は常に衣服ばかりを造り、他人の分までも造る代りに、住家と食料は他人より仰いで暮して居る。斯く事業を分擔すれば、同一の個人は、長く同一の業に從事し、隨つてその業に熟達するから、一人で何でもする野蠻人に比較すれば、家でも衣服でも無論遙かに立派に出來る。更に最も開けた文明國では、分業が最も進んで、蝙蝠傘の骨ばかり造る工

擔當　タンタウ。

分業

場もあれば、饅頭に入れる餡ばかりを造る會社などもあつて、各個人のなす仕事は甚だ狹くなり、その代りにその仕事は極めて精巧な域に達する。されば今日一國の文明野蠻の度を測るには、分業の行はれることの多少を以て標準とするより外はないが、さて文明國と野蠻國とが戰爭をすれば、いづれが勝つかといへば、之は素より論ずるにも及ばぬことで、同じやうに武器と名はついてゐても、野猪や鹿を獵する片手間に燧石を缺いて造つた石鏃と、螺旋を造る職工は螺旋のみを造り、筒を磨く職工は筒ばかりを磨いて居る兵器工場の製作品とは、到底相對すべきものではない。それ故、實際野蠻國は漸々文明國に攻取られ、野蠻人は追々文

餡　アン。

燧石　ヒウチイシ。火打鎌と打合はせて火をとる石英。

石鏃　セキゾク。石製のやじり。

螺旋　ラセン。

懸隔

酸素
無色無味無臭の氣體。地球上最も多量に存在す。

循環

炭酸瓦斯
無色にして微臭を有し、やゝ酸味ある氣體。腐敗・燃燒・動物の呼吸等によりて生成せらる。

排泄物
ハイセツブツ。

個體

明人に敗れて斷絶せんとする有様である。之は極端と極端との比較であるが、斯く懸隔の甚しくない場合でも、理窟は全く同様で、分業が少しでも進んだ方が必ず仕事が幾分か優るわけ故、他の事情が總て同一である場合には、分業の進んだものゝ方が勝つと見てよからう。

動植物の生存競爭に當つても同様なことがある。凡そ動物が生活して行くには酸素を吸入れることも必要であり、滋養分を全身に循環せしめることも必要であり、炭酸瓦斯その他の排泄物を體外へ出すことも必要である。また運動も感覺することも必要であるが、今こゝに多數の動物個體があつて互に相競爭すると假定するに、身體の各部の

神經

間に分業の行はれることの多いものは、人間社會の有様に比較しても解る通り、これら各種の仕事が皆善く行はれるから、分業の行はれることの少いものに對して勝つ見込がある。之が代々幾分づゝか勝敗の標準となれば、身體各部の間に分業の行はれぬ動物の子孫も、長い間には自然淘汰の結果、少しづゝ分業の行はれる動物に進化するわけであるが、同一の組織で種々の仕事を均しく完全に行ふことは出來ず、運動するには運動に適する組織、感覺するには感覺に適する組織が必要であるから、分業の行はれると同時に身體各部の間に組織構造の相違がなければならぬ。即ち運動を擔當する部は筋肉組織となり、感覺を掌る部は神經

感覺器　そとからの刺戟を、じうける器官。

鰓　エラ。

組織感覺器となり、消化の働をなす處は胃腸となり、呼吸を務める處は肺或は鰓となり、分業の進む程身體の構造も之に伴なうて益〻複雜になるものである。

分業の結果として生じた各組織は、恰も文明國の個人の如く、生活に必要な事業の中、たゞ一種だけを擔當し、他の事業は一切之を他に委ねて、その結果を收めるのみである。例へば運動の組織なる筋肉は、たゞ運動のみを務め、感覺の組織なる神經は、たゞ感覺のみを掌り、他の組織の吸入した酸素、他の組織の消化した滋養分の分配を受けて生きて居る。それ故若し運動の組織だけ或は感覺の組織だけを取離したならば、到底獨立に生存することは出來ぬ。分業の

進んだ動物の個體は、一種毎に皆異つた働をする組織が多數に集つて出來て居るから、その全部が完全でなければ生活が出來ず、一部づつに離しては忽ち死んでしまふ。斯く身體の諸部分の間に關係が親密で、全部完全でなければ生存が出來ぬといふことから、生存競爭に於て、遙かに分業の進まぬ生物に比して、不利益な場合もないとは限らぬ。しかし競爭者が雙方ともに分業の進んで居るときには、確かに一歩でも分業の先へ進んだものゝ方が勝利を得る見込を有する譯であり、且生存競爭の最も劇しいのは、互に最も相似た種類の間であるから、代々この標準に隨つて淘汰が行はれて、先づ簡單なものより次第に複雜な構造を有する

ものに進化し來つたと考へなければならぬ。實際動植物を多く集めて比較して見ると、分業の行はれぬ簡單なものから分業の進んだ複雜なものまで、漸次進歩する有樣を明かに順を追うて行くことが出來る。

（丘淺次郎―進化論講話）

丘淺次郎　理學博士。東京帝國大學出身。東京高等師範學校名譽教授。靜岡縣の人。明治元年生。

木枯のはてはありけり海のおと　言水

わが寢たを首あげて見る寒さかな　來山

枯蘆や難波入江のさゞら波　鬼貫

山寺に米つくほどの月夜かな　越人

貧交

交りは紙衣の切をゆづりけり　丈草

二一　はやり詞

反映

いつの時代にも一種の流行語といふものがあつて、其の時代の反映をなして居る。吾等が幼き耳に、慈母から聞いたお伽話の中にある日本一の黍團子や、日本一の花咲爺などいふ場合に使はれた日本一の語も、その起源を探つて見ると、やはり一時代の流行語として廣く用ひられた語で、確かにその時代の國民精神を表現してをるのである。尤も日本一などといふほめ詞は、如何なる時代でも誰でも自らこしらへて使ひ得る詞には相違無いけれども、それが一時代に非常に流行してをるのを見て、その當時の國民の思潮

國民精神

思潮　シテウ。

がいかばかり高まり、上下の元氣がいかばかりに壯んであつたらうと想像されるのである。日本一といふ形容語は、足利時代より德川時代の初期へかけてのはやり詞と自分は認めるが、その以前に用ひられなかつたのではない。優にやさしき平安朝の宮廷裡の婦人でさへ、きかぬ氣のものであると、「すべて人には云云」清少納言の枕草子に出づ。濱松中納言物語菅原孝標女の著。平安時代後期の物語。大鏡文德天皇より後一條天皇に至る百七十餘年間の歷史を假名混り文にて記したる書。平安時代後期の作。

新村出

てをあらむ。」などいふ位の見識があつたのだから、日本一といふ程の考がないわけはあるまい。濱松中納言物語・大鏡などにも、はや「日本一」「日本第一」といふ賞美語がいづれも二人には一に思はれずばさらに何かせむ。二三にては死ぬともあらじ、一に

箇處ほどに見える。又下つて鎌倉時代になると平治物語や平家物語の如き軍記物には、「日本一の不覺人」とか、「日本一の剛の者」とかいふ文句があり、當時代の初期の文書には、「日本第一の天狗」などと出てくるので、段々廣く用ひられて來たやうである。しかし足利時代になると、この俗語は益〻頻繁に用ひられ、又その意味も頗る擴張されてをるのである。曾我物語には、「日本一の不覺人」といふ句が出てをるが、義經記になると、數箇處に見えてゐる。例へば靜御前を讃美して、「舞においては日本一にて候。」といひ、「日本一といふ宣旨を賜はりけると承り候ひし。」といひ、又常磐御前の容色の美しきを、「日本一の美人なり。」などと、稱へるやうに、最上級の讃美

平治物語平治の亂の始末を記したる軍記物語。
曾我物語曾我兄弟仇討の物語。
義經記源義經一代の物語。
宣旨センジ。
常磐御前源義經の母。

言としてあちこちに使はれてゐる。謠曲などに、「日本一の御機嫌にて候。」「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。」「日本一烏帽子が似合ひ申して候。」などの使ひざまになると、如何にこの語が流行したかがわかり、從つて意味が大分擴がつて來た事が知れる。丁度同じ頃であらう、御伽話に黍團子をほめても、「日本一」といひ、花咲爺をほめても、「日本一」といひ、むやみにこの語を使つてゐる。謠曲で用ひてある以上は、狂言の上にあるのは當然の話で、「日本一の下手」といひ、「日本一の大小」などと見える。要するに足利時代は國民の元氣の大いに勃興した時代である。韓國や支那の沿岸を荒しまはつて、所謂倭寇を試みた時代である。高麗及び朝

謠曲　エウキヨク。うたひ。

丁度

狂言　能樂の間に行はるゝ一種の滑稽なる演技。

鮮との交通や、明との交通も盛んであつた時代である。末期になると、西洋や南洋との交通も開けたし、對外精神の發展は、遂に征韓の擧を起さしめるやうになつたのである。かくの如く外に向つて大いに膨脹し、侵略し、飛躍せんとする元氣を持つてゐた當時の我が國民は、內に在つては常に覇者たらんとする氣概を有し、淸女のいはゆる、「一に思はれずば、さらに何かせむ。」の意氣を持ち、日本一・天下一・三國一たらんずる心がけがあつたものと思はれる。

徳川時代は鎖國時代・封建割據時代である、國民精神の萎靡時代である。立派な覇者が唯一人江戸に構へて御座つた時代である。この征夷大將軍が卽ち天下一であり、日本

覇者　ハシヤ。

淸女　淸少納言。

封建割據時代

萎靡

征夷大將軍

一であつたのである。當代の民衆は將軍の威光を謳歌しつゝ、「日光を見ないうちに結構といふな。」といつた。日本一のかはりに寧ろ日光一といふ語でも出來さうなものであつたと思ふ。しかし、德川氏の時期に日本一の語が流行したことは、葡萄牙人の書いた日本文典の中に、形容詞の最上級として、この語を天下一といふ語と共に擧げて、「彼奴は日本一大けなげ者ぢや。」「天下一の學者である。」などの例を示してをるのでも知れよう。當時流行の俳諧でも、月花を賞めるには、猶往々この語を用ひ、「唐までも日本一の月夜かな。」「名木の花ぞ日本一の谷。」などとやつてをる。かの醒睡笑にも、「やれ、日本一の鈍なる弟子。」とか、「われは日本一の事をたくみ出いたは。」とか、「紙は日本一の播磨杉原。」とか見えるので、一般の事が推される。

彼奴

けなげ者

醒睡笑　八卷。元和時代に出たる輕口噺の本。安樂庵策傳著。

さて足利時代には、獨り日本一のみならず、すべて何々一といふことがはやつたもので、坂東一・四國一・中國一・西塔一、猶進んでは天下一・三國一などの語がある。天下第一の稱は、既に漢籍にも見えてをるのであるが、我が足利時代中葉の抄本にも見え、以後の軍記及び俗文學にも非常に多く使はれてをる稱號である。この稱は大抵、藝術界の優勝者、卽ちチャンピョンといふやうな意味で、一種の尊稱である。從つて俳諧にこの名が甚だ多く見え、月花を愛でるにも、やたらに天下一・天下第一といつたものである。かくの如く流

西塔　比叡山延曆寺の西塔。

中葉　中世に同じ。

抄本

チャンピョン　Champion

行した結果、餘り亂用し過ぎたので、遂に天和二年に、器物に天下一の字を記すことを禁ぜられた。一體、時代からいへば天下一の將軍の下に、むやみに天下一などと稱するのは不都合の至りなのであらう。天和二年といへば元祿の少し前で、はや大分德川時代の風潮が變つて來た。これで全く廢れたのではないが、戰國時代に流行しはじめた語が、太平の時代に衰へるのも、言語の運命上然るべき話だ。

天和二年　靈元天皇の御世。將軍德川綱吉の時代。（一六八四―一七〇四）

元祿　東山天皇の御世の年號。將軍德川綱吉の時代。（一六八八―一七〇三）

天下一に次いでは、三國一といふ語が、やはり同時代に流行したものである。これも始めは廣く用ひられた賞美語であるが、月・雪・花を愛でたり、美人をほめたりするほか、最も多くは嫁入や壻取の場合の祝辭に用ひられた。狂言に女

賞美語

子の姿の美なるを稱へて、「天竺・震旦・我が朝三國一ぢやよの。」といひ、秀句好きなるを、「唐土・天竺・我が朝三國に隱れがおりない。」と形容したり、醒睡笑に、「老僧のはたらき三國一。」などと、いつたりする。後世は嫁入・壻取か、さもなくば甘酒屋の看板に名殘を留めてあつて、現今も天下一などの美稱と共に、國產物などには記してあるのを折々見うけるが、まづこゝらが結末であらう。三國といへば、昔は日本・支那・印度であつたものが、今は露・佛・獨とか、日・英・米とかいふ工合に變つたのだから、右のやうな始末になるのも、あたりまへの話である。

天竺　テンヂク。印度の古名。

震旦　支那の稱。

日本一を始め、これらの語はみな足利時代からの流行語

新村　出
文學博士。言語學者。京都帝國大學教授。靜岡縣の人。明治七年生。

であつたが、時勢の變遷と共に段々廢れてしまつた。まあこれからは世界一といふ語か、さもなくば、「日本で第一。」といふ意味でなく、「日本が第一。」といふ意味で、日本一といふ語をはやらせねばなるまい。

（新村　出―南蠻記）

夏の天に數日雨無くて、民家干損を歎き、氏神の社頭に、風流をかけ雨を乞ふに、一滴も降らず。いつも降るが奇特やなど沙汰しあへり。かたくなゝる宿老うちうなづき、今度のをどりが一向氣に合はなんだ。何が太鼓をばてれつけ〳〵てつてれつけと打ち、鉦をばてんきや〳〵と叩いて、笛をひよりやひよりと吹いた物、何として降らうよ。

（醒睡笑）

二三　我が文化の將來

日本文明の發達の跡を顧みれば、常に外國文明を取入れて之を日本化して來た。即ち印度に起つた佛教を取入れて益〻發展せしめ、今なほ之を保存して居る。支那から儒教を輸入して、これ又その思想をとつて自己のものとし、加ふるに國字を工夫して國文學を起した。キリスト教は遙か後に輸入されたが、漸次日本化しようとして居る。而して現代は科學を輸入して之を利用する時期が到來しつゝある。見來れば皆外國文明の模倣のやうであるが、純粹の模倣ではない。模倣しては自分のものを作つたのである。

體得
發祥地
文化的事業
渾然　コンゼン。
分析　こまかにわかつこと。

或は少くとも之を體得した。佛教も儒教も、その發祥地に滅びて、日本にのみ殘つたのである。更に考へるに、過去に於ける日本では、優良なる素質を有するものが、戰術と宗教との方面に集つた爲に、他の文化的事業に於て貧弱であつた感がある。然るに今や偉才はあらゆる方面に向つて居るから、若しも我等及び我等の子孫が、先輩によつて示された模範に倣つて努力を續けて行つたならば、必ずや近い將來に東西の兩文明は、日本民族によつて渾然たる一體に融合せしめられ、古今未曾有の大文明が、東京を中心として起るであらう。その理由の主なるものは、

一、西洋文明は分析的であるから、之を學習することが容

綜合　すべあはすこと。

易である。之に反して日本の文明は綜合的であるから、歐米人が日本の文明を理解することは、日本人が西洋文明を體得する樣に容易には行かない。而して日本民族は、此の比較的、學習に困難な方面を先づ發展せしめ、更に西洋文明を輸入して居るから、兩種の文明を融合するに最も好都合な立場にある。吾等の祖先と現代の日本民族は、國語の學習に極めて多くの負擔を荷ひ、その上に外國語を學習する爲に二重の重荷に苦しんで來たが、その努力は今や漸く酬いられようとして居るのである。

二、二つの高い文明を融合したものは、その一つのものを發達せしめたものよりも、一層高い文明である。此の意味

に於て、東西兩文明の長所を採つて融合したものは、古今未曾有の最高文明である。

三、先進國は、天産物が豐富である上に、自然科學の知識を極力應用して居るから、所謂文明の弊を早くから受けて居る。而して今やその弊に耐へられない情勢を呈しつゝある。文明の中で最も重大なのは、歡樂を追求して物質過重主義になることと、種々の原因によつて出産率の減少することとである。

四、日本の位置は、東西兩文明の接觸點として最も重要な地位を占めて居り、その氣候は文明の發達に適して居ることである。

先進國

自然科學　自然の世界に關することを研究する學問。理化學の類をいふ。

物質過重主義

ルーズヴェルトは曾て次のやうにいつた。曰く、「昔、羅馬帝國の衰亡と共に、地中海時代は終りを告げた。大西洋文明の時代は目下その絶頂にあるが、これまた遠からず資源の枯渇を見るに至るであらう。而してこれに代るものは、實に太平洋時代である。惟ふに太平洋時代は、前記三時代中、最盛を極めるものであらう。それは世界全人類を包容して一團となすものであるから。抑〻人類は、次第に西へ西へと移住を行ふもので、その結果遂に地球を一周して、今やアメリカの西部の人々は、太平洋を中央にして、アジア大陸在來の人種と相對立して居る。米國人の運命は、右人類の新運動に伴なふ難關の第一線に立つものである。」と。

ルーズヴェルト　Theodor Roosvelt　米國の政治家。第二十六代大統領。（一八五八―一九一九）

枯渇　乏しくなること。

太平洋時代は既に到來した。而してこゝに大文明の起るべき機會に遭逢した譯である。日本民族の使命は、實に重大である。而して日本民族は、この重大使命を遂行するに十分な心身の力と、適當な氣候とに惠まれて居るのである。

日本民族の前途は、洋々として希望に滿ちてゐる。而もそれは、可能性である。この可能性を實現する爲には、我が民族の各員の思慮と努力とを必要とする。決して、單に日本民族の優越性を自負したり、外國人の言動を模倣するだけでは得られるものではなく、日本民族の大使命を自覺し、その實現に向つて精進することによつてのみ達し得られる。

フイエは、歐洲各民族について考察し、最後に結論として、「未來はアングロ-サクソンのものでもなく、獨乙人のものでもなく、希臘人のものでもなく、將又、ラテン人のものでもない。最も聰明で勤勉、且最も道德的のものの掌中に歸すべきである。」と云つてゐる。日本民族の將來を思ふ者は、當にこの至言を服膺すべきである。

（田中寛一――日本民族の將來）

さし出づるこの日の本の光よりこまもろこしも春を知るらむ

（本居宣長）

可能性　出來るべき性質。

フイエ　Alfred Jules Emile Fouillée　フランスの哲學者。

アングロ-サクソン　Anglo-Saxons　第五世紀の頃獨逸の北西部よりイギリスの地に入り、今日のイギリス人の主なる祖先となりし種族。

ラテン　Latin　民族の名。歐洲西南部に多く、文藝美術の技に長ず。イタリヤ・フランス・イスパニヤ・ポルトガル等の民族これに屬す。

田中寛一　文學博士。東京文理科大學教授。

日神　天照大神を申し奉る。

北畠親房　吉野朝の忠臣。正平九年歿。年六十三。（一九五二―二〇一四）

神皇正統記　一卷。親房の著。神武天皇より後村上天皇までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を陳べたるもの。

天壤と共に　日本書紀に、「豐葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可レ王之地。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆當レ與天壤一無レ窮者矣。」とあり。

二三　昭和日本

「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ此のことあり。異國には其の類無し。此の故に神國といふなり。」とは、北畠親房の神皇正統記の開卷第一に特筆大書したる文字なり。今や我が日の神の御子は、天壤と共に萬世一系窮りなき寶祚を嗣がせ給ふ。吾人草莽の小民、恭しく茲に忠良なる帝國臣民の至情と赤心とを披瀝して、一片の頌辭を奉る。

徳富猪一郎

草莽　サウマウ。

披瀝　ヒレキ。

皇室典範　皇位の繼承等について規定せらるゝ法典。

頌辭　ショウジ。

昭乎　セウコ。

宣命　國語を用ひて天皇の大命を宣布する公文書。

舊章古典

謹んで按ずるに、皇室典範第十條に曰く、天皇崩スルトキハ皇嗣卽チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク と。神器とは鏡・劍・璽の三種の神器を云ふ。此の神器の皇位の御守たることは、國史の上に昭乎として天日の如く瞭かなり。蓋し天子の位、一日も曠しくすべからずとは、歷世の宣命にも明記せられたる所なり。國家の變故に際する毎に、帝國の舊章・古典は、恒に吾人の指導者たり。今や親しく其の實物教訓に接す。吾人臣民は自ら顧みて、悠久なる歷史を持つ日本帝國の臣民たることを、無上の幸運にして且光榮たりと感激す。

恭しく惟みるに、今上天皇陛下には、天資聰明、仁孝の德、蚤

百揆　ヒヤクキ。

福祉　フクシ。

冥加　ミヤウガ。

感佩　カンパイ。深く心に感じて忘れざる意。

に天下に洽し。攝政として先帝に代り、庶政を總べ、百揆を攬り、其の御經驗や頗る多大なり。而して皇太子として世界を周遊あらせられたる如きは、國史上未曾有のことたり。吾人臣民は、洵に陛下の統治の下に、其の生を享け、其の業に就き、其の志を遂げ、其の務を果すことを得るを以て、比類なき福祉とし、冥加と感佩す。

皇政維新の大改革以來、既に六十年を經過せり。而して帝國の國運は、世界の變遷と與に勢ひ變遷せざるを得ざるものあり。特に世界大戰以來、世界に於ける無比の大國たる露、無比の强國たる獨、無比の舊國たる墺の三大帝國は、其の國命を革め、而して其の以前、東洋に於ける一大帝國たり

宣統帝　清朝最後の皇帝。西暦一九一二年退位。

一天四海

善處

形而下　形にあらはれたるもの、卽ち物質。

し清國も、亦宣統帝位を去りて、中華民國となりぬ。今や世界の中に於て、帝國の名實兩つながら全くして、巍然として列國の表に聳立するものは、東洋に於て大日本帝國あり、西洋に於て稍〻これに庶幾きもの、大英帝國あるのみ。

世界大戰の結果は、從來把持したる國際政局の平衡を打破して、未だ整一せる新局面を開展せず。一天四海看來れば、大風雨大洪水の後たらずんば、大火事の後たり。此の間に介在して善處せんとす。我が大日本帝國の前途も亦難いかな。

而も其の無秩序は、單に形而下の事のみならず。今日は世界に於ける思想上の一大混亂期にして、我が日本帝國も

驚波駭浪　キヤウハガイラウ。

中樞

亦其の驚波駭浪の中に立てり。物質的の鎖國の不可能なる如く、思想上の鎖國は、猶更不可能とする所にして、此の一大混亂期に際する吾人の覺悟としては、徒に外來の惡思想・惡傾向を防止するにあらずして、我自ら我が固有の本領を發揮せざるべからざるにあり。所謂彼の惡を禁ずるにあらずして、我の善を奬むるにあらずんばあるべからず。而して其の善思想・善傾向の泉源は、主として我が國民の中樞たる皇室にこれを求め、且これに則る事に力を致さゞるべからず。

我が國民の忠良なることは、國史の證明する所なり。而もこれ國民が獨り自ら忠良なるにあらずして、我が皇室の

涵養　カンヤウ。

太平記　四十卷。戰記物語の一。花園天皇より後村上天皇に至る凡そ五十年間の歷史。

脫線的言動

培育

寒心

須臾

恩德、よく國民の思想を涵養し、育化し、其の性情を感發し、興起せしめて、こゝに至らしめたるなり。

如何なる場合にも除外例はあり。若し仔細に國史を探求せんか、我が國民の少くとも或部分に於ては、其の忠良性を失墜したる場合、決して皆無にはあらず。一部の太平記を披きても、如何に我が國民の或者が、脫線的言動を逞しうしたりしかを知るべし。若し徒に國民の忠良性に依賴し、これを培育し、これを補充し、これを長養せしむる所以の道を竭さゞるに於ては、其の極或は寒心すべき結果を來さゞるとも限らず。此の一義は、須臾も忘るべからざる要件にして、殊に現今の世界思想混亂期に於て最も然りとす。

壯言美辭

洶涌　キヨウヨウ。波のわきたつ勢ひ。

掀翻　あがりひるがへる。

宸慮　シンリヨ。

奬順　ショウジユン。

乾德　ケントク。天皇の御德。

振古　古よりの義。

恢弘　クワイコウ。

今日は國家多難の秋なり。如何に壯言美辭を以て泰平を謳歌せんとするも、我が帝國が世界的大波瀾の洶涌中に掀翻せられつゝある實狀を看過する能はず。吾人臣民は、かゝる多難の時に際し、至尊の御新政を創始せられ給ふにつきて、深く宸慮を惱まさせ給ふを拜察し奉らざるを得ざるなり。而も我が國民は、悉く皇室中心主義者にして、至尊の御導きには、智愚・賢不肖を問はず、皆奬順せざる者なし。今日の急務は、たゞ至尊の乾德天の如き範を垂れ給うて、我が臣民を御指導あらせ給ふ一事に存す。而してこれ實に明治天皇の振古未曾有の皇運を恢弘あらせ給ひたる所以なりしなり。恐れながら新政の典型は、一にこれに基づか

六合　リクガウ。

八紘　ハツクワウ。

宇　國の四方のはての義。

ざるべからず。

抑〻神武天皇の業を創め給ふや、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩うて而して宇と爲すの大規模を建てさせ給ひぬ。明治天皇の御代を知ろしめすや、首めに五箇條の御誓文を立て給ひ、

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ　朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

と宣へり。而して天皇は、實に其の御言葉の如く行はせ給ひぬ。否御言葉以上に行はせ給ひぬ。

日本帝國臣民の尊皇心は、明治の御代、殊に其の末期に至

りて、最も深厚、熱烈に發揮せられたり。而してこれ國民の忠良心が、偶然に勃興し、一時に突發したるにあらずして、實に我が明治天皇の盛德の、國民を感化し、知らず、覺えず、こゝに至らしめたるものなりしなり。次いで大正の御代は、實に其の聖澤の中より出で、先帝よくこれを守らせ給ひしによりて、彌〻隆運を成しゝものと信ず。

草莽の微臣、此の國家の大事に際し、感迫り、情熱し、自ら裁する所以を知らず。たゞ恭しく滿腔の赤誠を披瀝して、天つ日嗣たる今上天皇陛下の萬歲を頌し奉るのみ。而してこれ實に我が帝國の忠良なる臣民の、心底より出で來りたる至誠の祈願なり。

（德富猪一郎―昭和一新論）

滿腔　マンカウ。腹一ぱいの意。
天つ日嗣
德富猪一郎　蘇峰と號す。評論家。貴族院議員。熊本縣の人。文久三年生。

自修文

一　蜜蜂

何とも聞き知らない物音――若葉にそよぐ晝の風にしては鋭く、家の前の小石道に軋るタクシィにしては圓みがあり、それがばさばさとつゞいて、裏木戸の邊へ落ちた。出てみると、一脈の雨雲といつては大き過ぎるが、何處から來たとも分らぬ蜂の大群が、樫の枝をかすめて、小さな物置の周圍に、亂れ、靡き、固まり、ほぐれ、飛び上り、舞ひ下つた。蜂は蜜蜂だ。

驚き、あわてゝゐるところへ、御用聞達があれよ〳〵と集つて來る。肥つた爺さんが天秤棒を置いて覗く。又隣の子守や、往きと

タクシィ　Taxi 辻自動車。

物識顔

も還りとも分らぬ通行人達までが垣のなかへ入つて來る。しかしそれらの人々が、いづれも刺されては大變と、用心しながら見てゐるのは何となくをかしい。結局蜜蜂は物置の側の塵箱へ、段々とはひり込んで、早速一かたまりに、うよ〳〵と巣をつくり始めたやうだ。

「これはお宅へ福が舞ひ込んだのです。お飼ひになつて御覽なさい、樂みなものですよ。」

と物識顔に藥局の御用聞などがいふ。

折角來た蜜蜂だから飼つてみるのも面白からう。しかしさうする爲には、先づ巣箱から造らなければならないが、不器用な自分にはそれが出來さうもない。それで結局賣つてゐるのを買ふことにして、家の一人が出かけたが、生憎出來合が無かつた。

夜になつて考へてみるまでもなく、一體この蜜蜂には主がなければならない。近處で蜜蜂を飼つてゐる家は無いかと、家族中で考へてみたが、どうも心當りがない。最後にはたと膝をうつて、裏の林業試驗場のではあるまいか、さういへば、

「其處の官舍の何々さんの家に蜜蜂がゐるよ。」

と子供の中の一人がいふ。電話をかけると、宿直の人が、

「それはどうも有難う。今係の方がゐないから、明日の朝早速こちらの數を調べて、もし減つてゐたら、もらひに行きます。」

といふ返事である。明日の朝まで宿を貸して置けばよいのだが、それにしても、受取りに來た時、まう何處かへ飛んで行つてしまつたといふのでは惡いといふ心配も起つて來る。

子供の書齋の窓から、一同が恐る〳〵塵箱を少し開けると、ゐる、

ゐる黄色の蜜蜂のかたまりは、晝間よりも益〻大きくなつて、まだ寢ずに夜なべをしてゐるのもある。

翌朝になつても試驗場からは何の返事もないので、また電話をかけると、ゆふべの人とは違つた聲で、

「こちらでは震災前まで蜜蜂を飼つたことはありますが、最近は飼つてゐません。」

といふ。

そこで改めて巢箱を探す氣にもなれず、いつそのこと欲しい人でもあつたらあげることにしようと、或農事試驗場に相談したが駄目だつた。

小鳥などだと餌の心配もあるが、蜜蜂は自分で飛び出して自分で運び込むから、その點はいゝやうなものゝ、あんなに箱のところにゐられては、塵が捨てられないので困る。出入りのタクシィ屋さんが來て、ビールの空箱に穴をあけて、その穴の周圍に砂糖を塗つて、塵箱の上へかざしたが、巢作りにいそしむ蜜蜂の一匹すらが顧みようとしないのは無理もない。

そのうちにまた藥屋さんの番頭さんがあらはれて、

「お得意に欲しいといふ方がゐますが、上げてくれませんか。」

といふ。殺さないやうに飼つてくれるなら、あげるといふことになつて、その夕方、番頭さんは小型の風雅な巢箱を抱へた一人の男をつれて來た。

さすがに專門家の仕事だけあつて、蜜蜂は首尾よく巢箱の方へ移つた。夜更けに藥局の番頭さんが、その巢箱を自轉車に乘せて持つて行つてしまつた。記念に、蜂の巢の小さな一つをもらつた

標本（ヘウホン。）

さば〳〵（清々したさまにいふ語。）

が、これは翌朝、末の子が學校へ持つて行くことにした。理科の標本として先生に上げるのだといふ。

蜜蜂が欲しいといつた藥局のお得意は、何處の人かといふことも聞かなかつたが、その後何ともいつて來ないところを見ると大分遠方の人らしい。

その後、蜂屋の語つたところによると、この蜜蜂は純粹のイタリヤ種で、買へば何十圓もするとか。しかし、そんなことは僕らの家庭にとつては、まことにさば〳〵した涼み話の一つである。

（土岐善麿―文藝遊狂）

手紙には狸、臺には鯉を載せ
竹の子は盜まれてから番がつき

（川柳）

二　亡　兆

人物　海賊の頭。
その手下五人。甲・乙・丙・丁・戊。
その他島の人多勢。

時　五六百年前。

處　瀬戸内海の阿波に近き小島。

第一場

海岸の小高い岡にある神社の玉垣の前、二基の高麗狗が左右に立つてゐる。右側の高麗狗の上に、海賊の頭（かしら）が跨がつてゐる。手下の五人が玉垣の上に乘つかつたり、高麗狗の臺に腰かけたりしてゐる。

頭　どうぢやらう。うまくこの島を逃出す工夫はないものかなあ。まう二十日にはなるぢやらう。どうも少し退屈した。う

玉垣（神社の垣。）

まい酒の一杯も飲みたい。初めは命拾ひをしたと思つて神妙にしてゐたが、かう長引いてはやり切れない。

乙　島人たちは俺達を普通の船頭だと思つて、徳島の御番所まで送り屆けてやると言つてゐる。

甲　御役人の手に渡されようものなら、折角助つた命が臺なしぢや。

丙　巧く船を盗むより外に、島を逃出す工夫はあるまい。

丁　だが、この島の漁船のやうな、ちつぽけなものでは、何にもならぬ。せめて三十石か五十石の船が來るとよいなあ。うまくこの濱へかゝれば、それを奪ひ取つてやるんぢやが。

頭　さうぢや。たゞ逃げるだけなら、今だつて逃げられるのぢや。だが、四國の島ぢや。向地へ逃げたところで仕方がないものな。

御番所　番人の詰所。

石　石は古、日本形船舶に用ひし積量の單位の名。

俺達が海の上へ逃げるには船がいる。海賊船になるやうな岩乘な船が、うまく船がかりしてくれると好いのぢやがなあ。

乙　おい。靜かに、靜かに。向うから藤六とか藤兵衛とかいふ男がやつて來たぜ。

海賊皆　だまる。島人一人、大きい魚籠をかつぎながら出て來る。高麗狗に乘つてゐる頭を見咎める。

島人　おい、おい。それに乘つちやいかん。おりろ、おりろ。

頭　不承々々におりる。

島人　このお狗樣に觸つてはいかんぞ。これは島の守神同樣に大切なもんぢや。この近處へ集つてはいかん。あちらへ行つてくれ、あちらへ。

海賊共　よし〳〵。合點ぢや。

島人　この島の世話になつてゐる間は、俺等の言ふことを聞いてくれねばいかん。此方衆は、船に乗ればどんな優れた船頭衆か知らんが、とにかく俺等に難船を助けられたのぢや。この島にゐる間は、おとなしくしてゐてくれ。この高麗狗は大切な守神ぢや。

頭　それはまた何故にぢや。

島人　此方衆は他國者ぢやから、知らんのぢやな。昔この島に尊いお坊さんがお渡りになつたことがあるのぢや。その時に色々とあらたかな功徳をお示しになつたが、さていよ〳〵島を去る時に、「さて〳〵、お前達には氣の毒ぢやが、この島は百年の後には海中へ消えてしまふ島ぢや。お前達には見えぬだらうが、それが地形の上にちやんと表れてゐる。」と仰せられた。島人等はそ

此方衆　コナタシユウ。おまへさんがた。

あらたか　功徳　クドク。

のお坊さんを深く信心してゐて、誰一人その言葉を疑ふ者もなく、子孫の爲に歎き悲しんだのぢや。すると、その聖は、島人の歎を哀れに思し召して、「それは天地の定まる命數で、人間の力でどうすることも出來ぬが、そのために命を失ふ人々が不便だから、それだけはわしが法力ですくつてやらう。」さう仰せられて、急に二臺の高麗狗を彫つて下さつたのぢや。そして、仰せられるには、「凡そ百年の後に、この高麗狗の兩眼に血が滲むことがある。その夜こそ、大暴風雨が起つて、この島の亡びる時ぢや。ぢやから、血が滲んだと見たら、遲滯なく島を離れよ。疑ふ者は命を失ふぞ。」と仰せられた。俺等はそれを子供の時からよく言聞かされてゐる。その大切な高麗狗といふのがこの高麗狗ぢや。

海賊等は今更のやうに高麗狗をじろ〳〵と見る。

命數　自然の定まれる結果。

法力　ホフリキ。

頭　なるほど、それは大切な高麗狗ぢやな。（兩眼を覗き込みながら）ぢやが、まだ大丈夫ぢやな。少し石が黑ずんでゐるが、この鹽梅では十年や二十年は大丈夫ぢや。

島人　馬鹿なことを言はつしやい。俺等は何時そのお知らせがあるかと、びく〳〵してゐるのに。この前を通る時は、誰でも氣をつけてお狗樣の眼を見ることになつてゐるのぢや。それでは皆の衆、以後はこの高麗狗をおろそかに思ひなさるな。

海賊共　よし〳〵、合點ぢや、合點ぢや。

島人去る。海賊達なほ高麗狗の周圍にうろ〳〵してゐる。

甲　馬鹿々々しい。こんな恰好の惡い狗だか猪だか分らない高麗狗に、そんな功德なんかあるものか。

頭　いや、かういふ片田舍の島人達といふものは、えてして馬鹿なことを本氣にするものぢや。

丁　馬鹿々々しい。こんな岩乘な岩ばかりの島が消えてなくなる道理がない。お天道樣が西から出れば知らないが。

乙　おい、どうだい。ものは相談だが、おれは一工夫ついたぞ。

甲・丁　何ぢや、何ぢや。

乙　この高麗狗の眼に惡戯をしてやるんぢや。

丁　惡戯つて、何ぢや。

乙　知れたこと。この高麗狗の眼に血を塗つてやるんぢや。

丁　なるほど。

乙　さうすると、島人等が泡を食つて逃出すぢやらう。きつと逃出すよ。みんな居なくなつてしまふぢやらう。

甲　そのどさくさまぎれにつけこんで、此方も島を逃げようとい

ふんぢやな。

乙　さうぢや。

丁　そいつは巧い考ぢや。

乙　どうぢや、頭、巧い考ぢやらう。

頭　巧く行かなくつても、退屈まぎらしには可からう。巧く行つたらお慰みぢや。

丁　よおし、俺が腕を突いて血を出してやる。

乙　よせ、よせ、そんな痛いことは。……彼處に先刻から犬ころが遊んでゐる。あいつを殺して血を出してやらう。

乙、舞臺の外に去る。

甲　面白い。

丁　なるほど面白い。島へ來て初めて面白い氣がする。

頭　巧く引懸つてくれると面白いがなあ。

乙、犬ころの死骸を持つて來て、その犬の血を取つて、高麗狗の兩眼に塗る。

丁　それで可い、それで可い。

甲　俺達は彼處の松林へ行つてゐて、そつと此方の樣子を見てゐよう。

六人連れだつて去る。舞臺暫く空虛。十五六の娘二人、籠を携へて通りかゝる。神社の方へ向つて拜む。ふと高麗狗を見る。

娘の一　あら、大變ぢや。血ぢや、血ぢや。

娘の二　嘘ぢやらう。血が著いてゐりや、大變ぢやぞ。

娘の一　嘘なもんか。此處へ來て見さつしやれ。

娘の二　（近づいて見る）あゝ、ほんに血ぢや、血ぢや。これは大變ぢや。

をぢさん、をぢさん、早く〳〵。

娘二人、悲鳴を上げながら狂奔する。島人、二人三人五人六人と、次々に四方から走つて來る。「なるほど血ぢや。」「血ぢや、血ぢや。大變ぢや。」「大變ぢや。高麗狗の眼が赤ぢや、血ぢや。村中へ知らせろ。」「鐘を打て。」「大變ぢや。高麗狗の眼が赤いぞ。」「島の最後が來たぞ。早う島中へ知らせろ。」島人たち口々に絶叫しながら、右往左往する。全島、騷然として、一時に混亂する。

第二場

前場と同じ。同日の午後。島は再び靜寂に返つてゐる。以前の高麗狗の前に、海賊達は毛氈を敷き、家具財寶類を積重ね、銘々に美服をまとひ、酒樽を置列べ、酒宴を開いてゐる。乙、藁に差した錢を持つて出て來る。

乙　まだこんな物が殘つてゐた。ゆつくり搜せば、金目な物がまだ澤山あるぢやらう。

丁　まう島人達は一人もゐないか。

乙　まうゐない。最後の船も半里ばかりは漕出してゐるぢやらう。

戊　これでやつと一安心ぢや。

頭　さうぢや。久しぶりにうまい酒が飲める。なか〳〵好い味ぢや。錢はすつかりで幾らある。

甲　五百貫文位はあるぢやらう。

乙　船も、出來かゝつた船が、船造場に殘つてゐる。あれを今夜中に何とか仕立てゝ逃出すのぢや。明日の朝になると、島人等があわてゝ歸つて來るぢやらうから。

頭　あはゝ、あはゝゝゝ、馬鹿な奴等ぢや。巧く一杯喰はされて、あ

貫文　古の貨幣の單位。

のあわてやうは何といふ事ぢや。

甲　明朝、島が殘つてゐるのを見たら、どんな顏をするぢやらう。

海賊達　あはゝゝゝゝゝ。

頭　馬鹿な阿呆ぞろひぢや。

海賊達　あはゝゝゝゝゝ。

とたんに、さつと吹起る一陣の風、激しく砂をとばす。

乙　何だ、ひどい風ぢやなあ。

二陣三陣、ごう〳〵と吹募る。

甲　急に吹出しやがつた。

丁　（空を見上げる）何時の間にか空が眞黑になつてゐる。

ぽつり〳〵と大粒の雨が降つて來る。

戊　雨だ。しけるのぢやな。

しける　海上風雨盛んなること。

頭　（ふと不安になる）島が消えて失くなる時は、大暴風雨が起ると言つたなあ。

皆、不安らしい顏を見合はせる。

乙　頭、何を下らないことを言ふのぢや。俺が高麗狗の眼に血を塗つたのぢやぜ。

恐ろしき雷鳴。風雨、勢ひを增す。皆恐れをのゝく。

頭　おい、眼を洗へ、高麗狗の。

丁　合點ぢや。

丁は御手洗の水を手拭につけ、高麗狗の眼を洗ふ。血は少しも落ちず、却つて眼の中から流れ出すやうだ。

丁　や、落ちるどころか、眞赤な血が後から〳〵と流れ出して來る。

頭　えつ。

御手洗　ミタラシ。手水所の意。

乙　そんな馬鹿なことがあるものか。

乙も高麗狗に近づき、懸命に眼を洗ふ。甲・丙・戊、皆これにならふ。風雨・雷鳴のうちに、海賊どもは狂氣の如く眼を洗ふ。血は少しも落ちぬ。風雨益〻募り、電光・雷鳴は愈〻激しい。

乙　あゝ、いけない、消えない。

甲　どうしても消えない。

乙　こんな筈はない。あゝ、いけない。

丁　何だか、島が少しづつ下がつて行くやうぢや。

頭　（ふと後を見る）あゝ、駄目ぢや。見ろ、潮があんな處に來た。あの岩があんなに沈んでゐる。

丁　あゝ、あすこの岩はまう半分沈んだ。

乙　あゝ、いけない。潮ぢや、潮ぢや。

晦冥　クワイメイ。くらきこと。

菊池寛　小説家。香川縣の人。明治二十二年生。

頭　あゝ、まう駄目ぢや。困つた。ほんたうぢや。島人の言つたことはほんたうぢや。

六人、右往左往して遁れようとする。雷鳴・風雨の音の中に、奔流の如く押寄せて來る海潮の物凄い音。その中に斷續する人間の悲鳴。天地晦冥の中に、高麗狗の眼だけが赤く爛々と輝いてゐる。——（幕）——

（菊池寛—菊池寛全集）

天明大火の後、小澤蘆庵は京外の太秦に假住居してありけるが、或夜盗人ども來たりて、翁の家の遣戸をこじ開けて入らむと窺ひたるを、翁早くも氣づきて、身には腹卷を著、右の手に長刀を拔きもち、左の手に手燭執りて、盗人ども入らば斬らむの勢ひを示しつれば、盗人ども入りかねて歸りぬ。その明日の夜も來たりぬれど、又同じ態にてあるに、流石の盗人もあきらめてか、遂に來ずなりぬるまゝ、

ありそみの巖こごしみ越えかねてよるよるかへる沖つ白波

（菅茶山—筆のすさび）

天空海闊　度量ひろく氣象の大なること。

小牧山　愛知縣東春日井郡に在り。天正十二年(一二二四四)秀吉と家康と戰ひし地。

賤が岳　滋賀縣伊香郡に在り。天正十一年(一二二四三)秀吉と柴田勝家と戰ひし地。

三　眞男子

何をか男性美といふ。

氣象の天空海闊なるにあり、勇快果斷なるにあり。秀吉曰く、「我に謀叛する者はよもあるまじ。我ほどの主はあるまじきものを。」と。秀吉は男性美を發揮したる一人なり。彼の度量は大いにして、胸は廣く、能く清濁を併せ呑むの概ありき。小牧山の役に當り、秀吉、千利休の茶會にあり。戰起ると聞くや、勇快果斷、そのまゝにたち上り、尻をまくりて、えいや〳〵とて出陣せり。賤が岳の戰には、疾風迅雷の如く進軍し、須臾にして、金瓢

豐臣秀吉

佐久間玄蕃　名は盛政。柴田勝家の臣。

然諾を重んず　一たんひきうけたることは必ずこれをしとぐる意。

男伊達　强をくじき弱をたすくるを自己の任務とする人、所謂俠客。

市井の徒

氣魄

の馬表、岳麓に現れ、佐久間玄蕃をして進退度を失はしめたり。

男性は義俠心あるべきなり。然諾を重んじ、他人の急に走り、利害の打算以外に面白き氣象あらざるべからず。往時我が國に男伊達といふものありき。多くは市井の徒にして、中には無賴漢もなきにあらず。從つてその道德の如きも偏頗にして、識見も高からざりしが、その勇氣ありて水火をも辭せざる底の心意氣に至りては、誠に欽すべきものありき。威武に屈せず、權貴を恐れず、自家の利益を犧牲にして他を濟ふの氣魄に至つては、また江戸時代の名物たりしに恥ぢずと謂ふべし。

男性は能く責任を知る。事を曖昧模糊に附するは男子の爲すべき所にあらず。人の臣としては、人の臣たる責任を知り、人の將たらば、人の將たるべき責任を知る。學生としては學生の責任を

知り、子としては子の責任を知る。凡ての人、皆この責任を知らば、國運は隆々として旺んなるべく、社會の文化は駿々として進むべし。野球・庭球の如き、又漕艇の如き、各人その責任を知つてこれを盡すを以て、その遊技に統一あり興味あり、若し各人個々勝手の事を爲して、その責任を蔑視せば、これ等は到底行はるべきものにあらず。遊技には獨り責任を知りて、その他には責任を忘れんとするが如きは、思はざるの甚しきものなり。

男性の美なるは、常に後暗からざるにあり。後暗きものは、とかくに隱れんとし、左顧右眄して、敢へて進まざるなり。男子は公明正大、皎々として白日の如くなるべし。自ら潔きものは進むに勇あり、事を爲すに恐るゝ所なし。孟子曰く、「自反而不縮、雖褐寛博、吾不惴焉。自反而縮、雖千萬人、吾往矣。」と。人誰か過なからん。過を

左顧右眄　四方八方に氣を配ること。
皎々
褐寛博　カツクワンハク。

悔ゆるが男らしき所にして、男性美の存する所なり。古聖人はいへり、「過則勿憚改。」と。また曰く、「君子之過、如日月食。」と。非を遂げ過を隱しおほせんとするは、畢竟自ら難地に蹈込んで、常に後暗き思をなすものなり。過あらばたゞちにこれを悔い、悔いてこれを改むるを勇ありとなす。過は日月の蝕するが如く、浮雲の翳すが如し。これを改むれば、また赫々として光明あり。男性美はその男らしきによりて現る。英雄といひ、偉人といひ、君子といふ、皆男性美を發揮したるによりて、他の渴仰を受くるなり。

古の氣概あり、識見ある者は、自ら稱して大丈夫といへり。大丈夫とは「ますらを」なり、男子なり、眞男子なり、最も能く男性美を發揮するもののいひなり。自ら大丈夫と信ずれば、時に遇ふと遇はざると、運と不運と、皆問ふ所にあらず。たゞ己が信ずる道に進み、そ

古聖人　孔子を指す。
翳す　カザす。
渴仰　カツガウ。信じ尊ぶこと。
時に遇ふ

の所信を貫徹するに於て、最も勇あり、斷あるなり。余は今の青年が常に自ら大丈夫を以て任じ、その男性美を發揮せんことを切望してやまざるものなり。

彼の蒼たるものは天、我等が住める大地すら、既に滄海の一粟に過ぎず。況んや我が生の須臾なるに於てをや。然れども、その須臾なると、その滄海の一粟たるとは問ふを要せず。男性美は宇宙に於ける一奇觀なるべきなり。感化は永遠なり。男子の事業は悠久に互りて渝らざるなり。我等は男と生れたるを誇りとす。男にして男らしからずんば、寧ろ男たらざるにしかず。既に男として生れたる以上は、男性美を發揮せずんば、男としての生れがひなきなり。

男子としては眞男子たるべし、大丈夫たるべし。他人の力にたよること勿れ。我が力を頼みとし、我が生の眞面目を發揮し、我が事業をして久遠の事業たらしめよ。一時は花の如し。永遠は果實なり、種子なり。

（笹川臨風―男性美）

彼の蒼たる云々　韓愈の祭二十二郎文に、「彼蒼者天、曷其有極。」とあるによる。

滄海の一粟　蘇東坡の前赤壁賦に出づ。

一奇觀

大丈夫の世に在る、剛操の志あらずんば、心を存すること能はざるなり。剛はよく剛毅にして物に屈せざるをいふなり。操は我が義とする志を守つて聊かも變ぜざる心なり。大丈夫はこの心を存せざれば、我が好惡する所において必ず屈し易く、義を守るところたしかならざるなり。故に剛操を以て信を立て義を堅くする行とするなり。清廉正直も剛操を以てせざれば立たず。況んや士たるの道、常に剛毅を以て質とし、その守る所を變ぜざるを以て行とす。人誰か生死利害好惡あらざらんや。内に剛操を以て究理するが故に、死の至つて惡むべきもなほ安んじて死に就き、害の至つて避くべきもなほ安んじて害を受く。財寶の必ず好むべきも、なほ安んじてこれを避くるに至るは、剛毅節操を高く守るにあらずば誰かこの行をなさんや。

（山鹿素行）

常用漢字表

(一) 本表ニナイ漢字ハ假名デ書ク。
(二) 固有名詞ニハ本表ニナイ文字ヲ用イテモ差支ナイ。タヾシ外國(支那ヲ除ク)ノ人名地名ハ假名書トスルコト。
(三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞オヨビ助詞ハナルベク假名デ書ク。
(四) 外來語ハ假名デ書ク。

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【丿】久之乏乗【乙】乙九乞也乳乱(亂)【亅】了事【二】二互五井【亠】亡交亦京亭【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余佛作伸使来(來)例侍供佳依侮侯侵便係促俊俗保俠信修俳俵俸併(併)倉個倍倒候借倫倶仮(假)偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚偽(僞)僧價儀億儉償優【儿】元兄充兆兇先光兌克免児(兒)

【入】入内全両(兩)【八】八公六共兵具典其兼【冂】冊再【冫】冬冷凉准凌凍【凡】凡【凵】凶出【刀】刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺剋(刻)則削前剛副割創剰(剩)劇劍剤(劑)【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝労(勞)募勢勤勲励(勵)勧(勸)【勹】包【匕】化北【匚】區【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷即【厂】厄厘厚原厥【厶】去参(參)【又】及友反叔取受【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告周味呼命和咽哀品咸員哲唐唱商問啓唯善喉喜喪単喫嗣嘉器噴嚴嘱(囑)【囗】囚四回因困固国(國)囲(圍)園山(圓)図(圖)團【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓塀(塀)増墨墮壁壇壓壊(壞)【士】士壮壱(壹)寿(壽)【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妙妨妥妹妻姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠婚婦娼婿媒嫁嫡嫌嬢【子】子字存孝季孤孫学(學)【宀】冗(冗)宅守安完宏宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寝実(實)審写(寫)寛宝(寶)【寸】寸寺封射將専尉尊尋對導【小】小少尚【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屈屋展層履属(屬)【山】山岡岩岳岸峠峯島峡崇崎崩【巛】川州巡巣【工】工左巧巨差【己】己【巾】市布帆希帝帥師席帳帶(帶)常幅幕幣【干】干平年幸幹【幺】

幻幼幾【广】床序底店府
度座庫庭庶康廉廊廃(廢)
廣廳(廳)【廴】延廷建廻
【廾】弄弊【弋】式【弓】弓
弔引弟弱張強弾【彡】形
彩彫彰影【彳】役彼往征
待律後徐径(徑)徒(徒)得
従(從)御復微徵德徹【心】
心必忌忍志忘忙忠快念怒
思怠急性怨怪怯恐恥恨恩
恭息悔悟患悖悲悼情惑惜
恵悪惟惰悩(惱)想愁愉意
愚愛感慈態慕惨(慘)慢慣
慨慮慰慶慾憂慎憐憚憲憶
憾憤懇 應懲 懷 懸 恋(戀)
【戈】成我 戒戰戯(戲)戴
【戸】戸戻房所扇【手】手
才打扱扶批承技抑投抗折
抱抵押抽拂拍拒拓抜拘拙
招披拝括拳拾持指振捕捧

捨掃授掌排掛採探扣(控)
推接提揚換握揭揮援描挿
損搖搜摘携摩撫択(擇)撃
操担(擔)拠(據)擬擴摂(攝)
【支】支【攴】收改攻放政
故叙(敍)教敏救敗敢散敬
敵敷数(數)整【文】文
【斗】斗料斜【斤】斤斥斬
斯新断(斷)【方】方施旅
旋族旗【无】既【日】日旦
旨早旬旭昇昌明易昔星春
昨是映昭時晩晝普景晴晶
智暇暖暗暑暮暴暦曇曜
【曰】曲更書曹曾替最會
【月】月有朋服朕朗望朝
期【木】木未末本札朱机
朽杉材村東柿杯東松板枕
林枚果枝枯架柄某染柔査
枢柱柳栗校株根格栽桃案
桐桑梅条(條)梨械棄棋棒

棟森棺植楠業極栄(榮)構
概楽(樂)楼(樓)標樞模様
(樣)樹橋機横檄檢櫻欄権
(權)【欠】次欲款欺歌歎
欧歓(歡)【止】止正此歩
武歳歴帰(歸)【歹】死殊
殉殖残(殘)【殳】段殺殿
毀【毋】母毎毒【比】比
【毛】毛【氏】氏民【气】気
(氣)【水】水氷永汁求汗
汚江池決汽沈没沖沙汰河
沸油治沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪活派流
浦浪浮浴海浸消渉液淑涙
淡浄淫深混清浅(淺)添減
渡温測港渇湖湧湯渊(淵)
源準溢溶溺滅滋滑滞(滯)
滴満(滿)漁漂漆漏演漠漢
漫漸潔潜(潛)潮沢(澤)激
濁濃湿(濕)済(濟)濱滝(瀧)

湾(灣)【火】火灰災炊炎
炭烈無然煉煮煙照煩熟熱
燃燈 焼 営(營)爆炉(爐)
【爪】爪争為(爲)爵【父】父
【爻】爾【片】片版牌【牙】
牙【牛】牛牧物牲特犠
(犧)【犬】犬犯状狂狩狭
猛猫猶獄独(獨)獲猟(獵)
獣献(獻)【玄】玄率【玉】
玉王玩珍珠班現球理琴環
璽【瓦】瓦瓶(甁)【甘】甘
甚【生】生産甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畜畝略番画(畫)異畄
(留)当畳(疊)【疋】疋
疎疑【疒】疫疲疾病症痘
痛痢療癖【癶】登発(發)
【白】白百的皆皇【皮】皮
【皿】皿盆益盛盗盟尽(盡)
監盤【目】目盲直相省眉

看眞眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研
(硏)硬硯碁砕碑確磁磨礎
【示】示社祈祕祖祝神票
祭禁禍福禦礼(禮)【禾】秀
私秋科秒租秩移税程稚種
称(稱)稲稿穀積穂穏【穴】
穴究空突窃窒窓(窗)窮
【立】立章童端競【竹】竹竿
笑笛符第筆等筋筒答策算
管箱節範築篤簡簿籍【米】
米粉粒粘粗粋精糖糞【糸】
系紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺終組結
絶絡給統糸(絲)絹経(經)
緑維綱網綴綻綿緊緒線締
縁編緩緯 練縛 縣 縫 縮縦
(縱)総(總)績繁織繕繪繭
繰継(繼)続(續)【缶】欠
(缺)【网】罪置署罰罵罷

羅【羊】羊美羣義【羽】羽翁
翌習翼【老】老考者【而】
耐【耒】耕【耳】耳聖聞聯
声(聲)職聴(聽)【聿】粛
(肅)肇【肉】肉肖肝股肥
肩育肺胃背胎胞胴胸能脈
脊脅脚脱腐腕脳(腦)腰腸
腹膚膜膝胆(膽)臆膺臓
【臣】臣臥臨【自】自臭
【至】至致台(臺)【臼】與
興挙(擧)旧(舊)【舌】舌
舎【舛】舞【舟】舟航般舵
舶船艦【艮】良【色】色
【艸】芝花芽芳苑苗若苦
英茂茶草荒荷荘菊菌菓菜
華万(萬)落葉著葬蒙蒸蓄
蔓薄藏 藝 藤薬(藥)【虍】
虎虐処(處)虚(虛)号(號)
【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融虫(蟲)
蚕(蠶)蛮(蠻)【血】血衆

【行】行術街衝衛【衣】衣
表衰袋袖被裁裂裏裕補装
裸製複褒襲【襾】西要覆
【見】見規視 親覚(覺)覧
観(觀)【角】角解(解)触
(觸)【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評詞
詠試詩詰話詳誇諮誌認誓
誕語誠誤説課調談請論諭
諸諾謀謁 講謝謠謹謬証
(證)識譜警訳(譯)議護誉
(譽)読(讀)変(變)譲【谷】
谷【豆】豆豊(豐)【豕】豚
象豪豫【貝】貝貞負財貧
貨販貫責貯弐貴買貸費貿
賀賃賄資賊賓賜賞賢賣賤
(賤)賦質頼購贈賛(贊)
【赤】赤【走】走(走)赴起
超越趣【足】距跡路踊躍
【身】身【車】車軌軍軒軟

軸較載軽(輕)輩輪輸輯輿
轉【辛】辛弁(辨辯)辞
(辭)【辰】辰農【辵】込迎
近返迫迭述迷追退送逃逆
透逐途通速造連週進逸遂
遇遊運過道達遥逓(遞)
遠遣適遭遅(遲)遷選遺遵
避還辺(邊)【邑】邦邪邸
郊郎郡部郵都郷【酉】酌
配酒酢酬酷酸酔醜医(醫)
【釆】釈(釋)【里】里重野
量【金】金釜針釣鈍鈴鉛
鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼録銭
(錢)錯鍋鎖鎮鏡鋳(鑄)鐘
鉄(鐵)鑑鑛【長】長【門】
門閉開閑間閣閲関(關)
【阜】防附降限陛院陣除
陪陳陰陵陶陥陸陽隆隊階
隔隙際 障隣随(隨)険隠
【隹】隻雀雄雅集雇雌双

（雙）雑離難【雨】雨雪雲零雷電需震霜霧露霊（靈）【青】青静【非】非【面】面【革】革靴【音】音響【頁】頂項順頓預頑領頭頻題額顔願顛類顧顕（顯）【風】

風【飛】飛飜【食】食飢飲飯飾養餓余（餘）餐餅（餠）舘（館）【首】首【香】香【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒驅驗驚駅（驛）【骨】骨髄（髓）体（體）【高】高【髟】

髪【鬥】闘（鬪）【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鶏【鹵】塩（鹽）【鹿】麁（鹿）麗（麗）【麥】麦（麥）【麻】麻【黃】黃【黑】黑黙点（點）党（黨）【鼓】鼓

【鼻】鼻【齊】斉（齊）【齒】歯（齒）齢（齡）【龍】竜（龍）【龜】亀（龜）

『注意』本表ニオイテハ（ ）印ヲ附シタ原字ヲ捨テ、コレニ對スル簡易字体ヲ一般ニ採用スル積デアル。

正俗字表

正	頤	遊	陰	穎	悅	園	豔	歐	應
俗	頥	遊	陰	頴	悦	薗	艶	欧	応
正	廈	解	蠏	岡	昂	叓	效	敲	羹
俗	厦	觧	蟹	崗	昻	更	効	敲	羮
正	函	閒	雁	贗	巖	旣	棊	器	羈
俗	凾	間	厂	贋	岩	既	棋	噐	覊
正	廐	況	卻	腳	躳	區	懼	臥	畫
俗	厩	况	却	脚	躬	区	惧	卧	畵
正	囘	挂	會	訛	廣	獲	闊	款	寬
俗	回	掛	会	譌	広	穫	濶	欵	寛
正	關	館	羣	刑	憩	攜	叫	隙	獻
俗	関	舘	群	刑	憇	携	呌	隙	献
正	減	鼓	互	恆	拘	喉	國	窗	雙
俗	减	皷	牙	恒	抅	喉	国	窓	双
正	象	冊	插	參	傘	贊	讚	柿	廁
俗	象	册	挿	参	仐	賛	讃	柹	厠
正	絲	觜	諡	辭	牀	莊	像	證	眾
俗	糸	嘴	謚	辞	床	庄	像	証	衆
正	準	所	敍	衞	宂	繩	脣	識	刃
俗	凖	𠩄	叙	衛	冗	縄	唇	識	刄
正	靑	壻	整	竊	潛	翦	纖	卽	馱
俗	青	婿	整	窃	潜	剪	繊	即	駄
正	體	恥	遲	晝	腸	場	著	廚	冢
俗	体	耻	遅	昼	膓	塲	着	厨 廚	塚
正	鐵	輒	廛	纏	鬭	柰	佞	霸	冒
俗	鉄	輙	壥	纒	闘	奈	侫	覇	冐
正	罰	鼻	冰	濱	幷	倂	竝	餠	貓
俗	罸	鼻	氷	浜	并	併	並	餅	猫
正	覓	臾	郞	棃	桺	畱	霤	兩	涼
俗	覔	臾	郎	梨	柳	留	溜	両	凉
正	稟	鄰	弄	往	韻	衞	甕	慍	溫
俗	禀	隣	挵	徃	韵	衛	瓮	愠	温

文部省檢定濟

昭和八年十二月二十七日　中學校國語漢文科用
昭和九年一月二十九日　實業學校國語科用

昭和八年八月一日印刷
昭和八年八月五日發行
昭和八年十二月十八日訂正再版印刷
昭和八年十二月廿一日訂正再版發行

最新國文讀本（全十册）
定價各金六拾錢

編者　佐佐木信綱
編者　武田祐吉
發行者　東京市神田區錦町二丁目七番地　湯川松次郎
印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　井下精一郎

發行所　東京市神田區錦町二丁目七番地　大阪市南區順慶町一丁目五十三番地　湯川弘文社